

淨土

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年十二月廿日印刷(本誌創刊二年一月一日發行)

第三卷 第一號



新 年 號

新刊

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ポバラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から
法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 社友の人隣 所行發 ◇

本社營業所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

電話牛込(34)

自一五二〇番 至一五二五番(6)
〇七六五番 一六二七番
二八五一番 二八五二番

榎町營業所

東京市牛込區榎町七番地

電話牛込(34)

自二四四〇番 至二四四三番(4)
三〇九八番 三八七一番
五五〇二番

銀座活字
販賣店

東京市京橋區銀座七丁目四番地

電話銀座(57)

〇〇七四番 〇〇七五番



大日本印刷株式會社

大阪出張所

大阪市北區西堀川町三四

電話北(36)

一六三三番 八二七五番

神戸代理店

神戸市神戶區榮町四丁目三六

電話三宮(3)

二八一八番 三四五三番

滿洲國代理店

奉天市工業區四馬路

電話日

四七〇〇番 滿 二二九三番



◇ 浄土 第三卷 第一號 一月號 目次 ◇

表紙

井上正春

扉

青柳喜兵衛

・カット

鈴木金平・五十嵐精

新春隨想

信念の樹立

浄土宗 管長

岩井智海 (二)

新年雜感

佐藤春夫 (二)

ムラガンド

大壁畫を完成して

野生司香雪 (四)

說苑

門出 (かどで)

眞野正順 (四)

特輯・私の生きる信念

菩薩行の喜び

醫學博士

井口乘海 (二)

人間道

文學博士

服部宇之吉 (三)

職業と人生

林學博士

本多靜六 (六)

人の根底

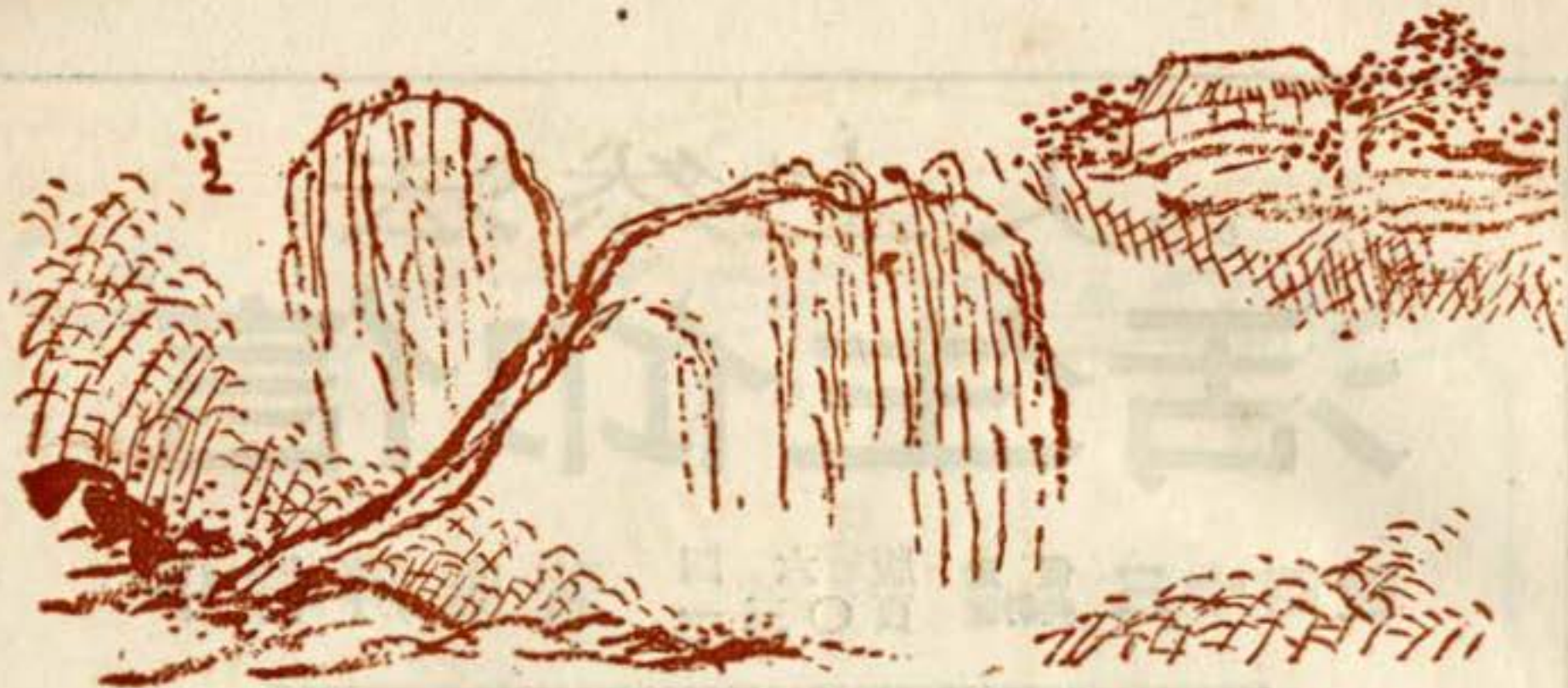
政友會 幹事長

安藤正純 (三)

新年頌歌

み堂の春朝

岩野喜久代 (三)
大河内啞佛 (三〇)



三來
夜話

信仰を刻み込む

増上主

大島徹水 (三)

隨筆

音に觀く心

相馬御風 (四)

短歌

田家雪

與謝野晶子 (二)

小説

獨房の中の光

(鈴木金平畫)

清谷閑子 (一)

童話

重い大きな袋

(野水昌子畫)

山田巖雄 (五)

隨筆

鳴立庵雜記

神林周道 (五)

淨土

困つた果てに

井川定慶 (五)

歌

壇

與謝野晶子選 (元)

俳

壇

太田耳動子選 (元)

信

仰相談

(六)

聖典

武装した菩薩道

大野法道 (四)

講義

小消息講義

中村辨康 (三)

編輯

後記

記

(七)

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料共 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活 第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活 一入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

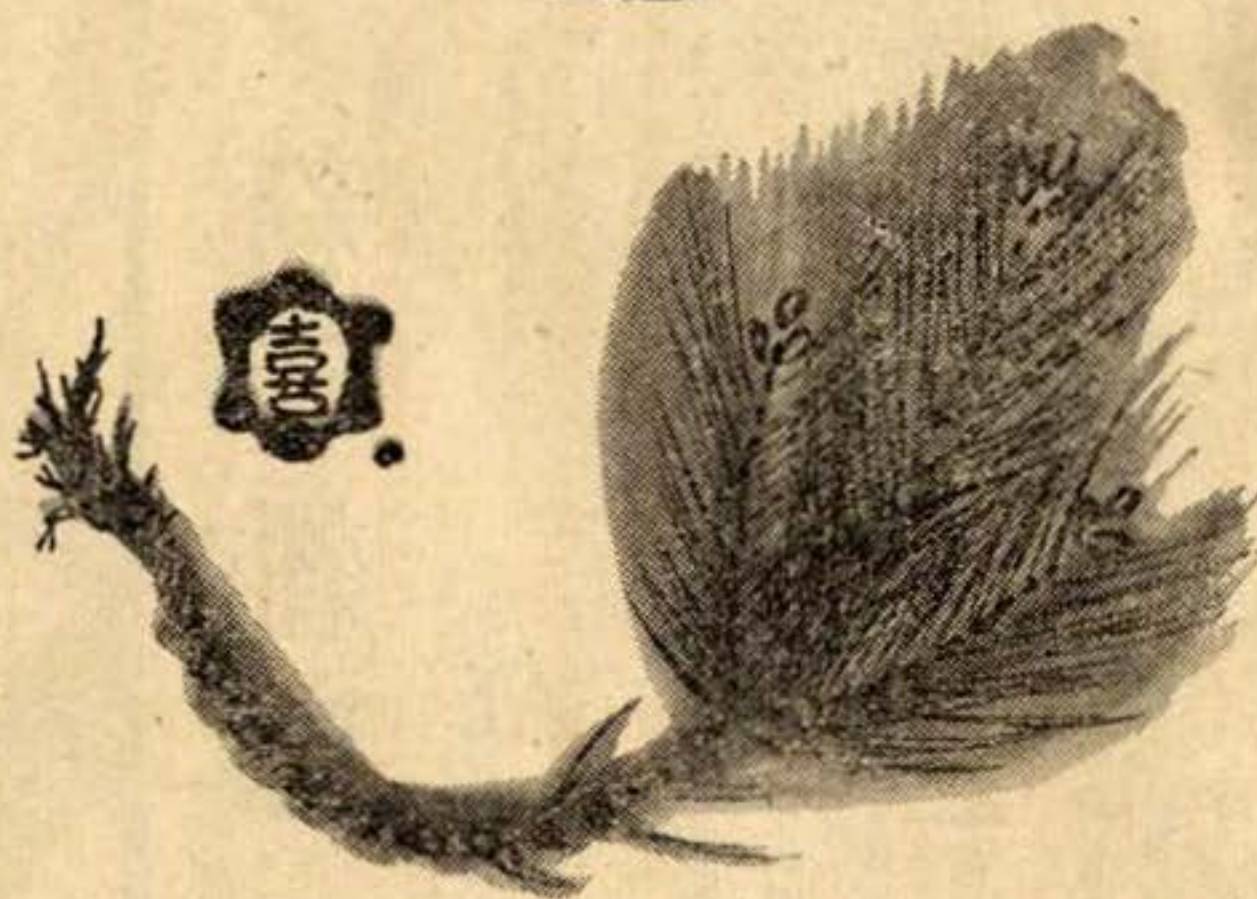
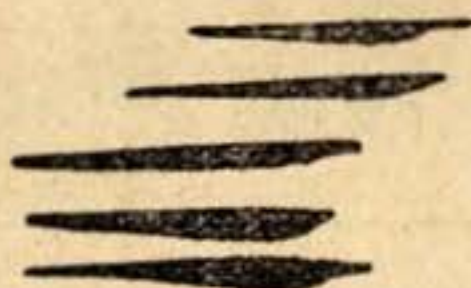
◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

淨土

新年號

雪のうちに
佛の御名を唱ふれば
つもれるつみぞ
やがてきえぬる

法然上人法語抄・二六〇



信念の樹立

浄土宗管長

岩井智海

明けまして御目出度うございます。

門松に照り映えてゐる太陽の光さへ新しく覺えて、身心自ら清新な氣に充ち満ちて参ります。そして、貧富貴賤の別なく、世間の一切の雜事を忘れ去つて、新年の喜にひたる事が出来ますが、何と有難い新年でせう。

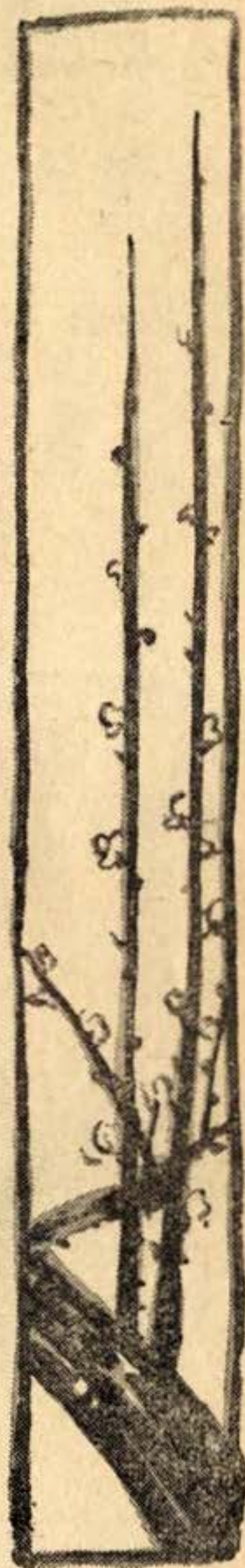
現代の我國は開闢以來始めてと云はれる程、重大な時期に直面してゐますが、この國家非常の時局に際して、かゝる安穩な長閑な新年を迎へる事の出来るのは、實に無窮の皇恩によるものであります。私は今年の新年を迎へるに當り、特に廣大なる皇恩の有難さがしみじみと勿體なく感ぜられます。と同時にこ

新年雜感

佐藤春夫

またここ數週間のうちに新年が来る。馬齒を一つ加へて四十六歳にならなければならない。新年もかう何度も迎へてしまふと別に變つた感想も起らない。新年よりも歳末の感の方が年々に深くなる、困つたものだ。どうも新年の感は少年に聞くべきものであるらしい。

新年は目出度ものといふ約束である。だから目出たい。だから一度この人間同志の約束を無視してしまふと更に目出たい理由がないわけである。そこで一休禪師などは目出たくもあり目出たくもなしと胸懷を見せびらかしたりする沙汰になる。人がめでたがつてゐるのにこんな事をするのはまるで意地の悪い



の皇恩に酬ひ奉る爲に、一死奉公の覺悟を以て、今年を充實した意義ある年としたいと考へる者であります。これは皆様も御同感の事と思ひますが、お互に、今年こそは省みて恥しからざる一年を過したいものであります。

然し、私共のかゝる決意も、絶対に動じない信念がなければ、中途にして挫折してしまひます。年々歳々、正月には今年こそはと、深く覺悟を定めますが、除夜の鐘の鳴る頃には、幾多の悔恨の思出のみが胸に浮んで参ります。正月には有難く感じた無比の皇國も、何時かは住みにくい世の中に考へてゐるのが、私共の情けない姿であります。總べての誘惑を退ける不動の信念がないからです。誘はれるまゝに右眇左顧して知らず識らずのうちに人生を闇くしてしまふからです。不動の信念のない者には明るき有難い世界は現はれて参りませぬ。

即ち、人生の最後の根據は不動の信念にあります。この信念は私共のさかしい計ひでは求める事は出来ませぬ。阿彌陀佛を唱へまつる信仰生活によつてのみ獲得する事が出来ます。信仰生活の樹立こそ、この世界を明るく意義あらしめる唯一のものであります。

非常時局を突破し、皇恩に酬ひ奉る爲に、今年こそ信仰による不動の生活を樹立致しませう。

やがらせ見たいな氣味がある。社交人なら一切慎しむべきであらう。しかし禪師は社交人ではない。世俗を捨てた出家で眞理に捧仕する身分である。して見れば一大事を人に説くに新年も大晦日もない。寧ろ、印象の最も深い元旦などを選ぶのが策のよろしきを得たものかも知れない。世俗の人はこの不作法が我慢出来ない。それで相手を狂人といふことにしてしまつてまあ我慢して置く。

禪師のやうな眞理の使徒は別問題として我等俗人はやはり俗人なみに人がおめでたいと申せばおめでたいと思つて置いた方が間違ひがない。狂人にされてみてもつまらぬ話だ。又事實、「きのふの鬼が禮に来る」などは至極おめでたい。太平の象である。せめて何人も一年の負債はその年の暮のうちに片がつくやうな世の中にしてもらつたら喜ばしからう。といつて元旦早貧棒話や不平もあまりおめでたくない。

元旦はやはり理窟や議論なしに、素直なおめでたうで行きたい。家長も奉公人も區別なく、お雑煮の数の多いのが、かるたのうまいのがえらい日にして置きたい。三百六十五日のうちにたつた一日ぐらゐ。

こんなおんびりした氣分の日があつても差支ないではないか。めでたし／＼と。

の寺—ダンガラ—ム てし成完を畫壁大

雪 香 司 生 野



灼熱の聖地インドのベナレス郊外サルナート(鹿野苑)に遷え立つ初轉法輪寺の大伽藍に、四年間の長日月に亘り悲壯な精進をつゞけて、遂に世界に誇るべき大壁畫「釋尊一代記」三十面の巨作を完成し、日本佛教藝術のため不丈の氣を吐いて歸朝された日本美術院の野生司畫伯は、去る十一月三十日官民多數の出迎へをうけて晴れの都入りをされたのであつたが、畫伯は長い苦闘にその疲れをもちとはず、早速本誌讀者のため特に四年間の心血を注いだ畫業實錄を御寄せ下さいました。こゝに讀者と、もにその御厚意を感謝したいと存じます。〔記者〕(上のカットは初轉法輪寺)

思ひ出は遡る

身にあまる光榮をいだいた私がその使命を果すべく豊熟の秋をすて、獨り祖國を旅立ち、憧れの聖地印度に向つた日——それは今からもう數年も前、昭和七年十月のことであつたから、もう遠い過去の思ひ出となつたわけだが、私にはまだたつた昨日のことのやうに思はれてならない。

初めに着いた處、それはガンヂス河の下流になつてゐるフーグリ



伯畫るす謝感てしと念獄に聲の呼歌た人迎出に扉京東

河の流れに面したカルカッタの街である。そこで西商品館長の厚意をうけて一先づ旅装を解き、その翌日、原領事や西館長と、もに印度屈指の佛教協會である『大菩提協會』を訪れて、かの佛教再興の偉勳者として輝く尊者達摩巴羅に親しく見ゆることを得たのであった。尊者は病床によこたはつて居られたのであつたが、侍者に促されてやほら體を起し、初對面の挨拶についでしてはる／＼此の印度まで來た私の勞を犒つて下さつたのであつたが、その時、尊者は早くも兩眼に涙さへうかべて、既にその目的（壁畫の完成）を成就したかのごとく喜び、

『佛教によつて育てられた日本美術を、佛教發生の地、この印度に

再び迎えることを得たのは、誠によろこばしいことである。これ即ち佛陀の力説したまひし因縁の成熟によるものであらう。——』
など、恰もわが子を迎えた老父がその喜びに己が病苦を忘れたかのごとく、滾々とつぎざる長話にいつしか晩秋の薄暮が窓近く迫つてゐるのも忘れてゐたほどであつた。

その後、私は壁畫の作製に就いて矢張り最初から關係をもつて居られた詩聖タゴールをその學園に訪ふたのであつた。翁は私の來園を知ると、八重の潮路をはる／＼渡つて來た遠來の客とばかりに悦びいさんで私をもてなし、

『日本と印度との親善は宗教と、藝術がその役目を擔はねばならぬ。どうか貴下の心に培はれてゐる佛教精神によつて最善の努力を拂つていただきたい。あなたの一生を佛陀に獻身したおつもりで……』

など、歓迎の言葉やら激勵の言葉やらを述べて、靜に冥想し、壁畫の完成を祈つて下さるのであつた。私はいま自分に與へられたこの大きな仕事をどうかして佛陀の加護によつて成就させていたゞけるやう、心からなる祈りを捧げたことであつた。私は詩聖のこの心に動かされ、この激勵の言葉をこよなき金言として、その後の畫業に精進しつゞけたのであつた。

畫業遅々として進まず

かくて私はいよいよ重き使命を擔つて、私一生の心血を注ぐべき佛陀の聖跡鹿野苑に向つたのである。

鹿野苑は曾遊の聖地で、心なき一木一石にさへなつかしみを感しながら、この聖土に二度目の一步を印したのであつたが、殊に昔ながらにこの鹿野苑の丘に巍々として聳ゆる寶塔を仰いでは一入その感を深うし、今回の大任務遂行を思うては萬感胸にこもろと湧き、今その氣持を表はすべき言葉さへ見つからないほどである。この鹿野苑の丘、紺碧の空高く描き出されてゐる殿堂こそ、これぞ人目をうばふにたる新に建立された初轉法輪寺（參照）精舎である。

精舎は内外兩陣に分たれ、外陣は鏡の如く磨かれた白光の大理石をもつて敷きつめられ、白亜なめらかな四方の壁面は、これぞ釋尊在世八十年の歴史を畫かんとして私の奉仕すべきところであると頷いたのであつた。

私がこの壁面に向つて筆を下すことになつたのは、もうその年も暮れて翌年の一月になつてからであつた。

今その壁面の構造について云へば、外部は石でたゞまれ、その内側が煉瓦、更にコンクリートといふ具合に三重になつて居り、その上に繪を畫くべき壁がしつらえてあつたのである。しかし、いよいよ着手してみるとこのコンクリート壁の含有素の副作用と、加ふ

るに印度の長い雨期と灼熱の氣温とによつて、動物性と植物性の色素が散逸するので、その繪具の變色著しく、いろ／＼と研究に研究を重ねた結果、漸くこれに成功することが出来たやうなわけで、此の度私が残して來た壁畫は地震か何かによつて壁面が崩れ落ちるやうなことの無い限りあのしつかりした壁と相俟つて永久に大丈夫なものであると信じてゐる。

次に畫題の扱ひ方であるが、これがなか／＼面倒で、この壁畫の依頼者側である大菩提協會の人達と意見の合はぬことが多かつたのである。先づ第一に着手したのが、西壁の大きな場内をしめる壁畫中でも最も大きな畫題で、釋尊降魔の圖（參照）である。これは私が最も力を注げるもので、萬一、未完成のまゝ倒れるやうなことがあつてはならぬと考へたからであつた。

ところが此の構圖を描いて居ると、先に述べた大菩提協會の尊者達摩巴羅が毎日のやうにやつて來る。そしてその構圖について、いろいろと異つた意見を述べて、私の構圖に反對するのでなか／＼遅遅として進捗しない。これは私の實に困つたことの一つであるが、こんな場合、漢譯の聖典に依ればかう書いてあるからなどと云つてその論據を示してみたとこで、それは先方では讀めないのだから一向に通じないし、どうしても私の意見を受けつけてくれない。さりとて確たる論據を示さない限り、尊者は自分の意見を唯一のものとして一步も譲らぬほど強硬な態度で、主張するのだから、ほとほ

と閉口させられた。ところが、こんな時に一番役立ったのは古い繪によつて説明すること、それによつて随分助かつたこともある。

勿論、大菩提協會は南方の小乗佛教に屬するものであるから、所謂北方の大乗佛教に屬する日本の私達の意見と異なるところがあるのはやむを得ないことである。(下圖は釋摩成道の畫とその作業中)

こゝで一寸説明しておきたいのは、尊者達磨巴羅は幼時より佛道に志して、印度に發生した佛教がその大陸に亡びてゐることを歎き、大陸に於ける佛教再興の大念願を起して、その實現のために一生を捧げ、全印度に向つて彼等の先祖が生んだ釋尊の教、即ち佛教發生の地たることを再認識せしめた功績は實に大なるものがある。

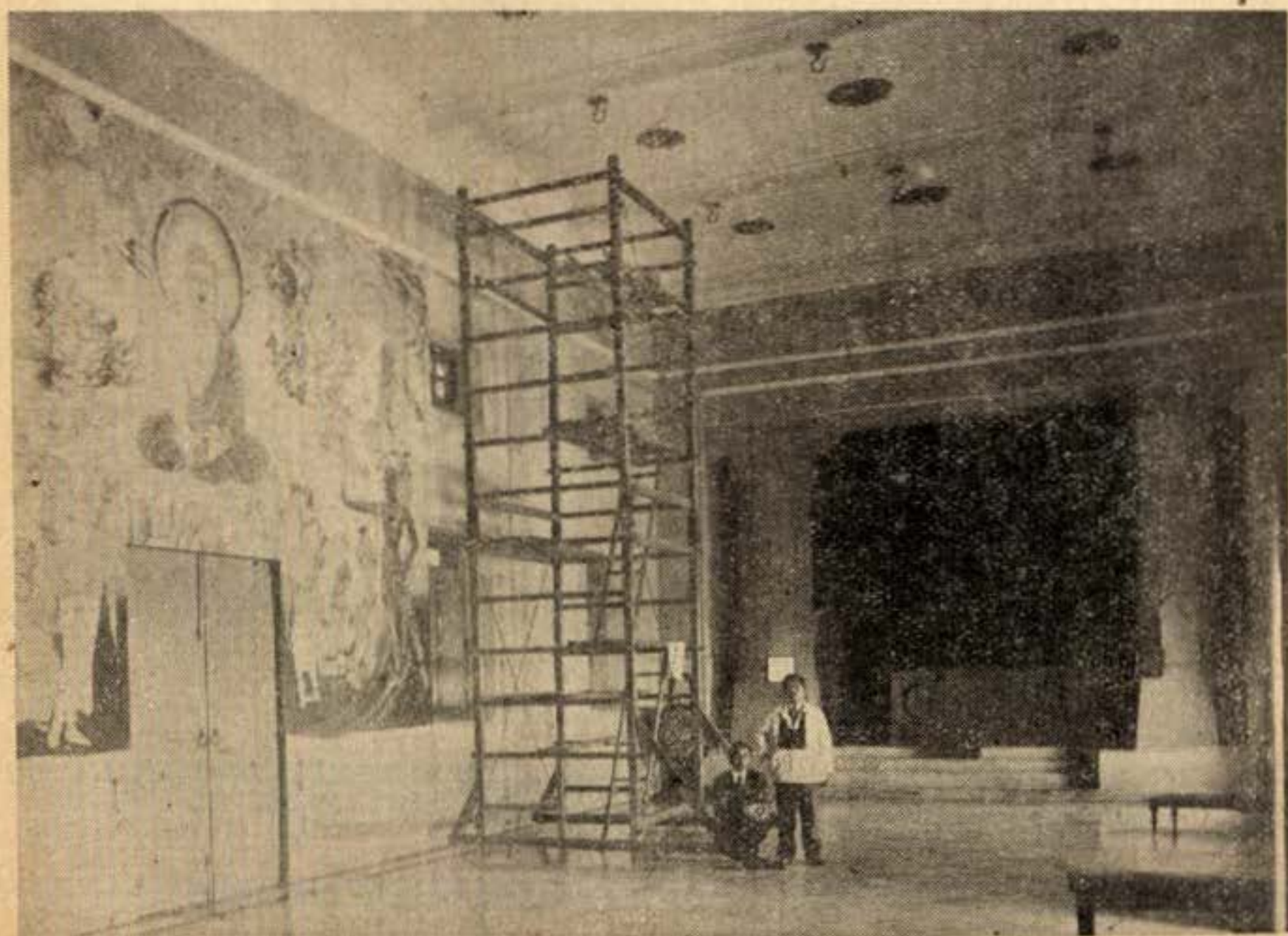
東西兩恩師の死

こんな具合に幾多の起伏を超へながら、いろいろな難事とたゞかひつゝ日を逐うてすゝむうち、遂に別な意味に於ける不幸が相次いで私を見舞つたのである。

— その一つは内地に於て、陰になり日向になりこの聖業の完成を後援して下さつた恩師渡邊海旭先生の逝去であつた。先生は私が祖國を出發するまでいろ／＼と御面倒をみて下さつたが、いよいよその出發といふ時になつて、私に一かけの威儀細といふお褒め(畫伯作業中の寫眞に見ゆ)を下され、その裏に、墨痕いとも鮮に、

忍辱之服

福田在衣



朝雨暮露 厭徳蠅々

と認められて、これを私に手わたしながら、慈父の眼差をもつて、

「後顧の憂ひなく、唯々心に精進して、この大業を完成して来い！」

と何ものにも代へ難い激勵の言葉をくだされ、更に、この言葉を説明するかの如く、

「如何なる困難あるにせよ、そこには必ずや目に見えざる大きな救ひの手があるものだといふことを仰ぎ信じて、専ら聖業のために獻身せよ。」

と繰り返して御注意下さつた 錢のお言葉も、今は遂に最後となつて佛祖の浄土に轉生されたのである。

この杖にも力にもとおすがりしてゐた恩師の計報をうけた時の私は傷心やるかたもなく、全く悲痛のどん底につき落されたのであつた。このため私の心は非常に動揺したのであつたが、

——先生からうけた高恩の萬一に報ひるのは、今この聖業を完成すること以外にない。

さうだッ！

あの 錢のお言葉はかういふ時に考へさせられる言葉であつたにちがひない！！

私はかう思ひ替へながら、今後は尊者達磨巴羅を『西の渡邊先

生』と仰いでこの聖業を達成しよう決心し、更に一段の全精力を傾注してその聖業に勤しむことにしたのであつた。

三ヶ月の月日が流れるやうに過ぎ去つた。毎日のやうにいろ／＼と私の仕事を見て下さつた尊者達磨巴羅は、不圖した風邪から肺炎を併發し、病勢急に更まつて遂に六十七歳を一期とし、あえなくも鹿野苑の露と消えられたのであつた。時に昭和八年四月二十八日、私は復もや自分の力の中心を失つた。

思へばその人寂の少し前のこと、尊者達磨巴羅は例の降魔成道の壁畫が完成したので、侍者とゝもにその聖場に現はれ、繪の隅から隅まで仔細に觀賞して、更にその正面に立ち向ひ中央壁上の佛陀に對座して、暫く冥想して居られたが、やほらその唇を開いて、

『あゝ、やつとこれで宿願を達した。』

と、一入感慨深げな面差をしてちつとその壁畫に見入つて居られた姿が未だに彷彿として忘れられない。

茫然自失といふ言葉があるが、實に文字通り私はこの聖なる聖業の中心たる東西の兩師を、殆んど時を同じうして失つたのであるから、その衝擊の大なること、今更云ふまでもない。

苦悶の四年

しかるに、その頃聖業は未だその中半にも達せず、前途なほ遠

なるこの事業に、豫定してゐた資金は早くも缺乏し、絶對絶命の處まで押しつめられて來たのであつた。此の見知らぬ土地にあつて窮乏のどん底に落ちた私は云ひ知れぬ心細さを味はねばならなかつた。かと云つて此の畫業を中止してこのまゝ歸國することも出来ず、私はハタと當惑してしまつた。大死一番この畫業の完成を唯一の誓願としてゐた私は、幸にも健康に恵まれてゐたので、この健康を元手としてこれを大成しようと決心した。その時私はこの受難こそ或は佛陀が私に興え給ひし試練の繩であるかも知れない、私はこの受難にうち勝たねばならない、いや自分からこの難事にぶつかつて行かねばならないとさへ決心したのであつた。

尤も日本を出發する當時の豫定としては、大體五ヶ月位で完成するものと思つてゐたのであつたから、その資金が不足して來るのも當然なことであつた。

かくて私は自分の健康をたよりに此の苦境を乗りきる用意をはじめることになつた。(下圖は川城前の情景)

○

四月の中旬頃ともなればこの地鹿野苑の氣温は百十度内外にまでなつて來る。壁は暑熱のために到底繪具を使ふことが出来なくなる。殊に五月から九月までの酷暑はどうしてもこの畫業を中止しなければならぬ。そこで私はこの期間を利用して盛んに幾多の小品畫作を試みたのであつた。そしてこれを我が同胞の在住する印度、



セイロン、ビルマの各地に數回の展覽會を開いて、同胞の絶大なる支持を得、その畫作を、幾らかづゝの資金に替え、そして又一步を進む。再び資金缺乏すれば再び展覽會を開いて、又一步進む。こんな具合にその進歩遅々としつゝも一步一步と完成して、遂に思はざる四年間の長日月を彼の鹿野苑の地に費し、やつと今日その宿願を成し遂げることが出来たのである。

先きには恩師渡邊先生に逝かれ、次いで第二の恩人尊者達磨巴羅を失つた私は、既にたよるべき人もなく専ら佛陀とともに起き、佛陀とともに寝てその畫業に精進し、絶大なる佛陀の功護によつてその在世八十ヶ年の歴史を三十面の壁畫に纏めることが出来たのである。思へば、これ佛陀の被護したまひしお蔭であり、佛陀に頼つてその完成を愈じつゝけた信仰の力の結晶であると悦びにたへないのである。

世界に雄飛する日本人

さて、いよいよ今回歸朝する前のことであるが、嘗て激勵を與へられた詩聖タゴールに壁畫完成の報告と、惜別の挨拶とを兼ねて、再び翁の學園を訪ねた。

私はタゴールに向つて、此の壁畫が私の同胞の力によつて出来たことを物語り、過去四年間のいろ／＼な追懷談をしてゐたところ、丁度そこに居合はせた某國の佛教哲學の教授も非常に感心して、

『あなたの國の人々はお互に美しい人情をもつて居る。私の國からこの印度に来てゐる人は、その數から云つても恐らく日本人の幾倍かになるでせうが、遺憾ながら他人の事業を援けやうなどと云ふ美しい人情は少しもみることが出来ない。』

と、云つて、暗然として自國民の義俠的精神のないことを歎き、『日本人が民族として榮へる所以は、かくの如く民族相互の間に相扶け相勵ます一致團結の精神があるからであつて、日本が實に今日世界に雄飛してゐる所以も亦こゝにあるものであらう。』と感嘆の辭をもらしたのを聞いた。

もし私が不幸にしてこの教授の屬する國籍にあつたとしたら、私の初轉法輪寺に於ける畫業は或は到底完成することが出来なかつたかも知れないのである。だが、幸にも日章旗を懸る日本に生を享けて、熱烈なる同胞愛の恵みに浴することを得たればこそ、此の聖なる畫業も幾多の辛難激浪に逢ひつゝ、しかも最後まで無事にその大任を果すことが出来たのであつて、蓋しその背後に見えざる佛陀の慈恩が同胞愛の發動力となつて表はれたことを感じ、日本國民が如何に佛教的に訓練されてゐるかを知つたのである。

こゝに大願成就して、恙なく歸朝することを得、改めて感泣拜謝の誠を述べさしてゐたといふ次第である。

——(昭和十一年十二月一日夜)——



田家雪

與謝野晶子

遠山はひさしの奥にしらじらと連り淡く田
 をおほふ雪
 すがしけれ雪の上にて積むわざす都へ送る
 これ若菜ども
 鶏舎なる鳥の群には少し似ず鶏冠をもたぬ
 門の田の雪
 初雪の夜は爐ばなしに更け行けば障子に雪
 も寄りて來るかな
 雪踏みて年賀に出づと申すらく天照す神豊
 受の神に
 裏山のなにがしと云ふ狸をば大人も作る正
 月の雪

(鈴木金平畫)



……特輯・私の生きる信念……



「菩薩行」の喜び

醫學博士

井口 乘海

私は滋賀縣の琵琶湖畔に在る一寒村の小さい眞宗大谷派寺院に生れた者で御座います、御承知の如く世襲寺院でありますので、私の父は寺の住職でありましたが、門徒僅に入戸と云ふ貧乏寺、どうにも仕方がないので、父は布教師として各地にお説教をして廻り、御法禮を頂いて生活の資となし、母は蠶を飼つたり田畑を耕したりして、漸くの事に私共兄弟四人を育てて呉れました。然し父も母も深く佛恩を喜び、二六時中御念佛を申しての生活、殊に貧苦に攻められて一厘の餘

裕もなきのみならず、時には借財に悩める有様、外に出ては侮蔑を受けて涙を含んで歸ると云ふ日常、此内外の煩悶を嘗めるにつけて、一層此世の味氣ない状態を痛感し、それを何處々々までも見捨給はぬ大慈大悲の佛様を喜び、此唯一つの御慈悲の下に感謝の生活を致して居りました、此信仰的家庭生活の中に育てられし私、今日考へますのに、父母は全く財産は遺してはくれませぬでしたが、此尊き御教を私の心の中へ植付けてくれました。此父母の深恩を謝せずには居られま

せぬ、私の父母は骨肉の親であると同時に、善智識様で御座います。私は唯今故郷の寺院の住職を致し乍ら、警視廳に奉職して「傳染病豫防」の重責を帯びてをります、年に一二度寺に歸りまして佛祖にお仕へ致し、門徒教導を致しますけれども、平素は「院代」に任せて居りまして、誠に申譯ない事を致してをるのであります。然し私は現在の日常生活の上に二つの大きい喜びを有つてをります。それは

(1)、僧侶に生れさせて頂き乍ら、寺院生



活をしないで居るのは申譯ない事ではあるけれども、然し現在の職務の方が適に「衆生済度」と申しては過言ですけれども、「人助け」になつて居ると思ふこと

(2)、醫師を職業として居たら、人の生命を預り、危篤を救つたか知れませぬが、それよりも現在の職務の方が、尙多數の人の生命を救つて居ると思ふこと

であります。其一例を挙げますと、私は唯今「赤痢疫癘の豫防」と云ふ事をやり、殊に夏季流行の多い七八九月の如きは大車輪になつて居ます、其方法として(イ)愛兒を有つ母性を教養することと、(ロ)内服豫防案」と申しまして、赤痢疫癘を豫防する様に、三歳から七歳までの小兒六十五六萬人に、お菓子やうなお薬を服用させて居ります、お蔭で昭和元年に疫癘の死亡率が七十五%と云ふ恐ろしい状態即ち疫癘患者四人の中で三人は死ぬと云ふ有様で、「コレラ」よりも

非道いと云ふのであつたのが、昭和十年には四〇%と云ふ工合に死亡率が激減致しました。

昭和八年から「デフテリア」の豫防注射と云ふのを始めました。現在も毎年二十七、八萬人の小兒に注射を致してをります、昭和三十八年に東京府下の「デフテリア」患者六千六百六十六名であつたのが、十年には五千四十名となり、十一年は多分四千三百名位で了

つたと思ひます。僅に四年間に患者千七百名も減じ得たと云ふ驚くべき成績を示してをります。以上のやうに赤痢豫防「デフテリア」豫防に努めさせて頂くにつれ、私のや

うなものが「人助け」即ち「菩薩行」をさせて頂いて居るかと思へる時、胸が込み上げる程の喜びを感じさせて貰ひ、我身の幸福の程が身に沁みまして、筆にも口にも表はせぬ難有い事で御座います。今年も此感謝の下に一層勇猛精進させて貰ひまして私の力ではなく全く佛の加被力に依つてやらせて頂きます御奉公にいそしみ度いと決心を致してをります

境悦法の覺味



ドーヨ然天性機有

ヨードの素は

天然に多量のヨードを含み有害なノリ分がなく湯水に良く溶けます

用ひ度い方

肥り過ぎ、高血壓、お産前後の奥様方、顔色の良くない方、風を引き易いお方

進サンプル呈

大日本水産工業株式會社

卓效藥
ブレインは

血液を清淨にし骨格と神経を強化する強力ヨード有機性剤



効能
動脈硬化、中風、腺病、授乳婦の機カルシウム不足



職業と人生

林學博士

本多 靜 六

勤勞を搾取するもの

私どもが人間としてこの世に生きるためには、まづどうしても職業といふものを持たねばならぬ。今こゝに云ふ職業とは、人間の生きる業といふことであつて、それは個人的にも社會的にも生活の

根底となるのみでなく、文化の向上も、社會の進歩も、凡て職業が基調となるのであるから、この意味に於て「職業即ち人生」と云ふことが出来ると思ふ。

實際、人は各々が自分に職業を選んで、社會生活の一部を分擔して、共に働き、お互に社會の繁榮を希つて行かね

ばならぬのである。だから人は貧しきものと、富めるものとを問はず、一人一職、誰でもが職業を持つて居らねばならぬ。職業を持つことは人間の義務であると共に生存權利でもある。

昔は職業を持つといふことに對する自覺が乏しかつたので、何にもしないで安逸豪華な生活をする人が尊ばれて巾を利かせたものであつたが、今ではさう云ふ人は、寧ろ人の勤勞を搾取する社會の寄生虫として罪惡視せられたやうになつてゐる。

それ故、眞面目に職業に生きることが正しい生活の第一歩である。誠に職業を尊び、職業を楽しみ、職業に努力する生活は、此世を樂園にするの道であるが、これと反對に職業をもつことをきらつて、惡僞徒食の生活をなすことは、此世を地獄へと導く道である。

『小人閑居して不善を爲す』と云はれてゐるが、これは獨り小人の



空論をやめよ

だが、社會生活といふものは複雑多様であつて、人間自體にも賢愚、才不才、適不適等があるから、必ずしも自己の性格、才能、得手等に適する職業を得られずとは限らない。假りに自己に適する職業に就くことが出来たとしても、その努力如何に依つては成功の出来ぬ場合もある。これと反對に初めは自己の性質に適しないやうに思はれた仕事でさへも、これを天職と確信して、迷はず疑はず、専心に努力する人に於ては、初めの間こそ多少の苦痛はあつても、何時とはなしに其仕事に馴れて自分にも適するやうになり、熱心に研究したり工夫したりするから、自然能率も上り、成績もよくなつてくるやうになる。従つてその仕事に興味を生じて面白くなり、遂には仕事をするものがその人の道樂となつてくるといふ具合になる。それこそ眞に職業と人格の

結びついた極致である。

「しかし職業の道樂化といつても、其の職業によりけりで、學者とか、藝術家、或は工藝家、農林業者のやうに、其の仕事が創造的である場合には容易に三昧の境地に没りうるものであるが、所謂、暖簾生活者の様に、一に長上の命令によつて機械的に働く人だとか、又は今日の大工場の職工のやうに、毎日毎日單調な部分的仕事を繰返へして計り居る人達は、到底職業道樂といった氣持にはなれない。」といふ人もある。

然しそれは、實際本當に努力した體驗のない机上論者の云ふ事で、眞に其の仕事に専心努力を續ける場合に於ては、如何に單調な機械的部分的な仕事でも、それに趣味を生じてくるやうになり、且つ自分の働らきが有機的に、其の仕事全體の上に貢献してゐるのだといふことも解つて、遂にはその仕事が道樂化して來るものである。

これに反して、仕事に不熱心であつたり、又は他の餘技に興味をもつ人は如何に創造的な仕事であつても、眞に道樂化した三昧の境地に至ることは出来ないものである。素より職業の種類によつて、其の道樂化に難易はあるが、熱心は工夫を産む母であり、努力は趣味と化する父であつて、如何なる職業と雖も、これに没入して道樂化し得られることは、實際に努力した者の等しく肯定する所である。

努力を樂しむ

一度、その職業が眞に自分のものとなつて、所謂道樂の境地に達すると、恰も子供が夢中になつて遊んだり、大人が碁を打つたり將棋をさしたりして居るのと同じで、全く時間や報酬に超越して努力するやうになり、努力そのものを樂しむことになる。これがつまり三昧の境地である。

そして仕事に對しては、當然、相當の



名譽も利益も與へられるものであることは勿論であるが、只茲に注意したいことは、元來名利といふものは與へらる可きものであつて、自分から求むべきものではないといふことである。自分から求めて得た名利は、やがて自分の苦痛の種となるが、當然の報酬として與へられたる名利は、更に名利の種となつて、眞にその人を幸福にするものである。

即ち、徒らに名利を求めて汲々たるものは、種子を蒔かずして、花や實を求めてゐるのと同じで、願ふことそれ自身が間違であり、多くの無理が生じて却つて身の破滅を招くことになる。

之に反して、働きの樂しみとする努力は、全く天地の自然に叶ふもので、善き種子を蒔いてその耕耘に精出す時は、一粒萬倍の稔となり、一部分は更に次の種子となつて擴がり、他の部分は人類の糧となつて、人類の生存と向上に寄與するやうに、人間に於ても眞面目な職業の努

力は、やがて種子のやうに稔つて自己に歸つてくるものであり、それが自然に報酬とか、地位とか、名譽とかの幸福となつて、自己に酬ひて來ると共に、やがて又社會をも利するものである。

斯くして茲に自他繁榮の道があり、茲に名利と徳との一致する麗しい人生があるのである。名利の爲に働らくのではない、仕事をするのが面白いから働らくのだといふ信條、即ち「努力を樂しむ」と云ふことにならなければならない。

胡魔化しの人生

然るに世には、徒らに享樂することを人生の的と考へ、成る可く働らく時間を少なくて、遊樂の時間を増すのが人生の進歩であり、文化であるなど云ふて、働らく時間を毎日四、五時間となし、他の大部分の時間は酒場、カフェ

ー、芝居、活動寫眞、又は運動競技等に耽り、日曜土曜の兩日は終日遊樂旅行に

費すのが、理想的文化生活であるといふ者さへある。

成る程、今日のバーやカフェーを遊び廻る御常連は、外見上は極めて幸福さうに見えるが、其の實本人自身になつて見れば、必ずしも樂しかつたり満足したりして居るのではなく、却つて人知れぬ苦惱を持つて居るのである。即ち就職難、結婚難、生活難等々、種々の不平不満の遺瀾なさの爲めに、温い家庭的安住の情味も知り得ず、又職業道樂、仕事三昧の境地にも達し得ず、なかば自暴氣味も手傳つて、強いて酒やジャズの力で自己の良心を胡魔化して居るに過ぎないのである。だから、遊情のうちに苦惱を求め、享樂の後暗黒に泣くもので、遂には人を怨み、世を呪ひ、自ら心身の破滅を來たすのである。

かくの如き現代人の病弊を救ふには、早くより職業に對する認識を深めしめ、人生に對する熱愛を高からしめ、以て眞



の樂しみこそ職業道樂、仕事三昧の中に開く花であり、眞の文化こそ職業を基調としての貢獻にあることを自覺せしめ、そこに人生の向上と社會の進歩が結實する事を理解せしめねばならぬ。

平凡と非凡

又世の中には、相當に名譽や地位のある人で、職業を單に食はんが爲の方便と心得てゐる人がある。例へば自分の本業は會社の重役であるが、歌や俳句、芝居やスポーツ等に趣味を持つてゐるといつて、その趣味に生きることが眞に生き甲斐ある生活として、『職業』と『趣味』と『生活』との三つを別々に考へてゐる者がある。然し、此の如き人生觀は不徹底極まるもので、『二兎を追ふ者は一兎も得ず』の諺に洩れず、結局自己の職業を忠實に全うする事も出來ず、またその趣味をも満足に得られないものである。他人が詩歌に趣味をもつてゐるからと云つ

て、自分の仕事を中途半端にしておき乍ら詩歌にうつゝをぬかすといふ如きは、私をして云はしむれば『凡人中の最も凡俗』なるもので、決して傑出せる人物とは云ひ難ひ。それ故、若し歌や俳句が天才であるならば、先づ本業を止めて、趣味本位の職業にうつり、芭蕉や蜀山人のやうに生活すべきであつて、さもなくば折角やり來つた本業に専心三昧し、その本業の道樂化に精進すべきである。

世には又、更に非凡な活動力と器用さを持ち、本業を人並以上にやり乍ら、尙餘力を藝術やスポーツに用ひ、これは却つて人生の見聞や常識を博める利益があると云ふ人もある。然し、斯る特別な人に對しては、敢てそれを止めなさい！と云ふ譯ではないが、私としては其の餘力をも尙本業に用ひて、本業をより完全に大成することを希望するものである。兎に角、何人も眞に興へられたる職業の完成に向つて精進するに於ては、自然

世の信用や名譽や利益も増して、漸次高まつてくると共に、其職業も亦廣範圍に生かされてくるやうになる。従つて、直接又は間接に、關係する學術や事業も増加して、職業其物を樂しむのみでなく、其職業の必要上から、交際も旅行も増し、傍ら自然美や藝術も相當に樂しめる様になり、別に趣味の生活を求むる必要も時間も無くなるものである。

されば私は、人間生活を眞に幸福ならしむる道は、『職業』と『趣味』と『生活』とが一元に歸することであると信ずるものである。これ實に業務精進の生活であり、眞にこの三つを一致さすことの出來る非凡なる信念人の生活にこそ、正しき人生、勝利の人生、幸福の人生が築かれるのであつて、斯る人々は地位の高低や、資格の有無を問はず、社會に無くてはならぬ有用な人となり、一家の繁榮は云ふに及ばず、郷黨社會に重きを成す人となるものである。



人間にんげんの道みち

文學博士

服部宇之吉

朝あしたに道みちを聞きかば

「朝あしたに道みちを聞きかば、夕ゆふに死しすとも可かなり」

これは孔子こうしが『論語』の中に云はれてある有名な言葉である。『論語』の文は概ね短いが、その短いまゝに讀み方にもいろいろと異説いせうの有あるものが少くない。今申した章の如ごときも亦左様である。又讀み方は同じでもその解釋かいしについて異説いせうのあるものも少くない。これも今申した章の如ごとき、亦然りである。しかしこゝでは、そんな異説いせうについては一切省略し、自分の善いと思ふものに依つて述べて見よう

と思ふ。

この孔子こうしの意は

「人にして道みちを知らずんば、是れ醉生夢死さいせいむじのみ、道みちを知つてこそ始めて生き甲斐がいのある生活を爲すことが出来る。朝あしたに道みちを聞きくことが出来たならば、假如其晩に死んでも遺憾はない。唯の一日でも人間らしい生き甲斐がいのある生活を爲すことが出来たなら、醉生夢死さいせいむじの幾十年にも勝るものである。人は道みちを知らねばならぬ、道みちを知ることことは人生の急務である。」

といふのである。

首くびと足しんにゆう

さて、その道みちとは、果して何物なニモノであらうか。それについて今少しく説明してみやうと思ふ。

道みちといふ文字を分けてみると、『首くび』と『足しんにゆう』との合體文字である。『首くび』は目的を示し、『足しんにゆう』は目的に達する路程みちのりである。

廣い意味から云へば、凡そ目的に達する路程は皆道であるが、併し、之を知るを以て人生の急務とせられたところの道は、廣義に従つて言ふものでないことは多言を要しない。荀子こうしが、「道とは天の道にあらず、地の道にあらず、人の道なり」



と言つてゐるのが、即ち其の道のことである。此の「人の道」を知り易く行ひ易くしたものが教である。孟子は、
「腹一杯に食べて、寒くないだけに着、身體を安樂にし、而して教なきときは禽獸に近い。」

と言ふて居られる。朝、道を聞いて禽獸たることを免れ、人として生きることが出来れば其晩に死んでも遺憾がないといふのが孔子の意味である。王陽明は知行合一を標榜して教を立てた人である

が、知つた事は必ず直ちに之を行ふといふ立て前でなければならぬ。随つて「其言の其行に過ぐるを取つ」と云ひ、又は「言、行を顧み、行、言を顧る」といふやう、言行の一致が大切であるから、道を聞くといふやうなことは、徒に道を知ることの意味するのみでなく、直ちにその道を行ふといふことも意味するのである。

荀子は道を「人の道」と爲したのみで

なく、更に一步を進めて「君子の道」と爲してゐる。君子とは小人に對する語である。扱て荀子が道を「君子の道なり」と言つたのは、君子には道があり、小人には道がない、といふ意味であるかと言ふに、決してさうではない。小人といはれるものも亦人であつて、禽や獸ではないからには、小人にも亦人として道がなければならぬ。

然らば、小人といはれるやうなものには「君子の道」と異つた他の道、つまり「小人の道」と云ふやうなものがあるのか、言葉を換へて云へば、右すれば「君子道」左すれば「小人道」といふやうに、君子小人二筋の道があるのか、復、孝・悌・忠・信は「人の道」であるが、不孝・不悌・不忠・不信は「小人の道」といふやうに道が二筋あるかと云ふに「人の道」は唯一筋より外にはないのである。孝・悌・忠・信こそ「人の道」であり、不孝・不悌・不忠・不信は「人の道」ではな

いのである。「人の道」は唯一筋で、君子も小人も同じく此の「一筋の道」を行くのである。しからば、「君子の道」「小人の道」といふ區別が出来るのは何故であらうか。

水 飴 の 用 途

此れに就いて思ひ出す一の話がある。昔或る人が水飴を發明した。ところが、一人の者がそれを見て、「此は誠に結構な物である。老人に食べさせるに宜しい。」と言つた。すると、も一人の者が「此は誠に結構な物である。戸の欄に流し込むと、戸の開閉に軌る音を防止する事が出来る。」と言つた。前者は親孝行の人であり、後者は盜賊であつたと云ふことである。

凡そ、人が常に心を用ひてゐる方面が違へば、其頭腦に浮ぶ觀念も亦違ふものである。今申した水飴の例の如きは、孔子の言葉をかりて言ふと「君子は義に喻



り、小人は利に喩る」と言ふところである。

君子と小人とは、同じ道に由つて行き乍ら、之に由る動機に義と利との別がある。君子と小人との別が生ずるのである。君子は何んな場合にも義によつて動くものであるが、小人は總ての場合に利を目的とするところが違ふ。

義と利との關係に就いて云へば、義は利の本であり、義は利を生ずるともいふが、此の場合の利は國利民福乃至正しき道を踐みて得る利をいふのであつて、『論語』に孔子が「罕を言ふ」と記された利とは違ふのである。

二つの心

義に就いていまいし説明しよう。心に或る意念が起つた時、一と先づ之を抑へて置いて、今度は全我を活躍せしめて、前に起つてゐる意念に對抗する今一つの意念を起し、この二つの意念についてよ

く比較し合つた上で、人として當にとるべき道を決定する。此の決定をするのに義の意念が結び付いてくるのである。即ち他の語を以て言へば、人として當に爲すべき道を正しくするところに義があるのである。だから、君子は總ての場合に當つて、人としては當にこの道を選ぶべきが當然であるといふ方面から、その行爲を決定するのである。此れが「君子義に喩る」といふことである。

されば行爲の結果として來たるべき吉福の如きは始めから目的としないのであるが、小人はこれと反對に始めから行爲の結果につくその利益を目的としてゐるのである。其處に君子と小人との區別が存することになる。

修己と治人

前に述べた道は人性に本來具つてゐるものであつて、自然に存在するものであるが、しかし乍ら、自然のまゝで其の道

が明かになつたり、教も何もないところに、何人でも道を知り道を行ふことが出来るといふことはあり得ないのである。何人でもが必ずこれを發見しうるものではない。即ち、一般の人は聖人の教を待つて、始めてその道を知り、その道を行ふことが出来るのである。

されば、聖人に學ぶとは「人の道」を學ぶことであり、人間性に本づいて立てられた教に依つて、自己の個性を磨きあげる修養にいそむことは勿論、更に進んで他の個性をして皆其の實現に努力せしむることをも學ぶべきである。即ち、これが自利と利他との兩方面にわたる點であつて、自己の個性を磨きあげる方面の實現を期することは、所謂修己であり、普く他の個性をして其實現に努めしむることは、所謂治人である。修己と治人、この二つを兼ねてこそ「人間の道」は此處に全くなるのである。(完)



信仰は人生の根底

立憲政友會幹事長

安 藤 正 純

「佛教は未來のことばかり云つてゐて、現在に重きを置かない。それでは現代の社會を導いて行かれない、だから佛教は世の中に遅れてしまふのだ。」と云ふやうなことを云つてゐる人が世間にはいくらかもある。それも物の解らない人が云つてゐるなら兎に角、上流階級、智識階級、指導階級の人達で、さう云ふことを云つてゐる人達があるのだから驚く。

實にくだらんことを云ふものだと思ふ。何故かと云ふに、佛教の根本の目的は安心立命と云ふことにあるのだが、これは同時に人生の根底でもあるからである。だから、この人生の根本問題に就

いて教ふる處の佛教が、何時の世に於ても、時代遅れであると云ふやうなことは言はれないのであつて、佛教に就いての世間の人達の關心が如何に低いかと云ふことが、これによつても解るのである。然らば、この安心立命とはどう云ふことか。

○

人間に死と云ふものは付きものである。世の中のこととは何事によらず、千變萬化極りないもので、何に一つとして變らないものはない。その中でたつた一つ變らないものがある。それは死と云ふことである。この死と云ふ問題は如何に議

論しやうと、講義しやうと決して變へることの出来ない避けることの出来ないものである。どんな人間も必ず遭遇しなければならぬ嚴肅な事實である。

ところで、この不變な避くべからざる嚴肅な事實、人生の大問題に對して明確な判斷、解釋を持たずしては、人生に對して一步も踏み出せるものではない。

斯ふ云つた所で、私がさう云ふ判斷、解釋をはつきり持つてゐると云ふのではない。しかし私は迷つてゐると云ふことに氣が付いてゐる。ところが世の中には、この迷つてゐると云ふことにすら氣の付かない人が澤山ある。これでは暗闇の中



を手さぐりで歩いてゐるやうなものである。かう云ふ暗闇の中に住んでゐる人が多いから、世の中に色々な醜惡な事實が次々に起つて來るのである。

世の中は常なきものである。日常の事實は委くこれ諸行無常、諸法無我なものである。しかもその中であつて死と云ふ事實だけは不變なもの、必ず人生に付いて廻つてゐるものである、人生とはさう云ふものである——と云ふことをはりつきと知り抜いて、始めてこゝに澗然大悟することが出來、あの暗闇の中から抜け出て、涅槃寂靜の境地に入ることが出来るのである。そして、こゝに於いて始めて安心立命を得ることが出来る。しかもこの境地に到達する道こそ、佛教の指し示すものであり、これが佛教の根本的な使命なのである。この境地に於て始めて人間は眞理の眼をみひらき、人生へ確實な一步を踏み出すことが出来るのである。

ところがこの大悟徹底、涅槃寂靜の境地とは、決して個人、人の力のみによつて到達し得るものではない。それは阿彌陀如來の大願業力の力に頼らなければならぬ。阿彌陀如來の大願業力に引き上げられて始めてそこに行くことが出来るのであつて、佛教の根底はそこにあり、人生の根本はそこにあるのだから、佛教が時代遅れだなど云ふのは、佛教を知らざるも甚だしいと云はねばならない。

○

現代の日本は人心不安にみちてゐると云ふ。この人心不安の最なるものは、邪教の跋扈と云ふ事實に現はれてゐる。それは人々が徒らに目前の利欲に迷つてゐるからで、そのために反つて、尊い人命を傷けたり、なけなしの財産を投げ出して仕舞ふと云ふやうなことになるのである。それは最初に述べたやうに「佛教は未來のことばかり云つてゐる」と云ふやうな極めて淺淺な考へに捕はれ、正しい信仰の何んたるかを理解しておらぬものが多いからであると云はざるを得ない。故にこの佛教の大精神に依て、生死巖頭に危坐して、大死一番、こゝに自己を發見し、人生を發見し、世界を發見して、往相回向より還相回向に廻り、以て活潑々地の力強き人生に生き、確固不拔の國家精神に活躍することが、現代に於て最も切實に感ぜらるゝ要求と、私は考へて居るのである。

(三三頁より)

その後私は田中佛師と、變らぬ親交を續けてゐるが、いつも佛師の口癖に「信仰の力、信仰の力、世に處するにはこれ以外の道はない。私も佛師で立つ以上、いろいろ技術の點にも腐心しますが、結局信仰の力が最後の鍵を握るものだ」とつくづく思ひました。しかも、自分の力ではまだまだ惠信をうつしきれないのです……

新春行
事の話

門松・しめ縄・除夜の鐘

一年中の行事では、何と言つても歳の移り變りの歳末年始ほど重要性を示してゐるものはあるまい。暮のあわただしさ忙しさから、一夜明ければ全く異つた新しい生命と光りとに浴し變るのである。人々の古い生命が死んで新しい生活がそこに誕生する。斯様に歳の移り變りは季節的記年的な變化を意味する丈でなく、人間生活の一變を意味するものであるから、そこに種々な過渡の諸儀禮と信仰習俗が見出されるのも當然なことである。

宗教學の上からは、人生に於る諸々の區切り、出産、七五三、元服、結婚、家督、隱居、病、死等に於て感ぜらるる生の危機に直而して發揚する諸儀禮を、凡て次の生への過渡として「過渡の儀禮」と呼んでゐる。此等の儀禮は、一樣に、前述の如き生の諸危機をそれに依て聖化し秩序づけ安寧裡に切抜けしめようとする意圖を有つものなのである。

神聖化して考へてゐるのであり、橙や裏白で飾つたりするのは一には邪惡を追拂ひ祥瑞を招かうとする除惡招福の意圖を示すもので松竹梅等の祥瑞を示すもので門松等を作るのも同じである。尤も斯様に家々の門口や庭等に樹を立てたりするのは七夕などにあつては神々の「憑りましの木」とせられるのであり、門松にも斯様な意味もあると考へ得るが、寧ろ多分に、例へば臺灣に於る如き門口に一對の男女神像を並列せしめたりするのと同様、邪惡な靈氣を鎮めて祥瑞の氣を満さんとするものと見てよいであらう。

所謂、除夜の鐘も、今でこそ百八煩惱の罪障消滅の意で百八つきはするが、之も聖なる鐘の響きにより、その力を借りて、邪靈の氣を打破して、人間社會から驅逐し代りに祥瑞を齎さんとする意味

を示すものであつたのである。勿論、かやうな時期に過去一ヶ年の罪過を洗ひ清めようとする「拂淨」の意味を有つ諸儀禮が行はれることは當然で、暮に「大祓ひ」と稱して人型の紙に千支年輪を記して神社で焼清めるのは一種の「身代り」の拂淨であり、罪障消滅を除夜の鐘がなすとするのもかやうな根據から言はれるやうになつたのであらう。

尙ほ此の期が人々の生活の更新を意味するので、その間には一種の「廻り」の儀禮も行はれ、古へは大君が一年一年死に甦らせ給ふものと考へられたので、所謂「大殿ごもり」の神儀は此の再生儀禮なのであり、大君の新たな御生命と御稜威とを新玉を迎へて國民一同祝ひまつるのが古來の國風なのであつた。



獨房どくぼうの中なかの光ひかり

—— 一青年いちせいねんの信仰告白しんかうこくはく ——

清谷 閑子
鈴木 金平 畫

(一)

私が初めて澤村氏に會つたのは、大阪の刑務所を出て、間もなくであつたと思はれた。

澤村氏といふ、最近稀らしい信仰家を、ご紹介したいから、ぜひ會つて貰ひたいといふ話しを、私は大川氏から聞くと共に、非常な期待を以て、大川氏の家を訪ねたのは、もう紅葉も散る初冬の、ある日の夕暮だつた。

大川氏は最近、大阪刑務所から、市ヶ谷刑務所へと轉任した人で、その紹介するといふ澤村氏もまた、大阪刑務所に、日本共産黨の三・一五事件で、入所してゐた青年であつた。

私が入つて行くと、應接間の卓子をへだて、向ひ合つてゐた二人は立上つて、私を快く一つの椅子に請じ、そして紹介が始まつた。

見ると澤村氏は、堂々たる體格の、温まじい風貌の青年で、和服の着流しに、大阪流の角帯、一見すると大店の番頭といった格好だった。

『でもよく、宗教をお信じになりましたですねえ、でも、外にお出でなると、信仰の點で、ぐらつきが生れやしませんか。』

と私が聞くのを、澤村氏は以ての外といふ風に首を振った。

『僕が宗教に入るのは、當然ですよ、そもそもマルキシズムを奉じた原因たるや、宗教の腐敗ほど恐ろしいものはないと思つたからです。僕は外のひとちがつて、人間の全面的な生活といふ問題で、どれほど苦しんだかしのないんです。ですからある種の腐敗墮落した宗教を、民衆の手から、取去つてしまふことが、一番必要だと思つたからこそ、根本的なマルキシズムの立場に立つたんです。』

私はびつくりして眼を睜つてゐた。

何といふテキハキしたものの言ひ方をする男だらうと、そしてその軽い驚きは、だんだん深い興味へと入つてゆき、彼の轉向の動機がそも何にあるかを、根掘り葉掘り聞く私を、そこに意識せずにあつた。

澤村氏は續いて説きはじめた。日本宗教の現状について、寺院の經濟方面や、僧侶の實生活などに對して、彼一流の理想的立場から、辛辣に批判するのだつた。何しろ十七の歳に濱松に於ける、樂器工場の大ストライキに参加したり、その刑が保釋中の體を以て、露西

亞に潜入し、クートベールで三四年教育を受けて、日本共産黨に於ける幹部としての資格を得るや否や、その使命を帯びて本國に歸つて來たのだつた。

歸るといつても歐羅巴よりの歸朝者が、シベリヤを廻つて來るやうな、暢氣なわけにはゆかないので、浦鹽廻りで敦賀に上陸、敦賀から變装して、大阪の我家に二三日がよりで夜送りついた時には、恰度十二月の三十日、大阪の商店町は、火事場のやうな歳末の賑ひの中にあつた。だから警察も搜索の手が届くまいし、じつに絶好の時機だつたと、彼は我家の上り框に、片足かけた時の瞬間には、嬉しきで思はず笑ひが口に上つた。

(二)

彼が歸つたといふので、母親は流し元から、ひゞだらけの濡れた手を拭き拭き上つて來て、茫然として四年目で見る我子の顔を、見上げ見下し、そこへ長兄がこれまた忙しうな厚司姿で現はれた時には、三人の眼は息苦しさで、お互ひに正視するに堪へないやうであつた。

奥に通つて、家庭の中でも比較的、弟に對する責任の軽い嫂が、茶を淹れたり、壽司を取つて來たりして、ひどく氣持を和らげてはくれたけれど、長兄の表情には、一種言ふべからざる頑ななものを感ぜないであつた。しかし彼は四年もの間、音信不通



たらざるを得なかつた今日までの行爲に對して、長兄の憤りは餘りにも當然すぎると思ひ、決してそれを不満に思ふ筈はなく、その怒りを和らげるために、むしろあけすけと告白したがよからうと、

露西亞に潜入して
クートベ
ーで共產
黨の教育
を受け、
その使命
を以て日
本に歸つ
て來たこ
とまで、
一通り打
明け、
『もうこ
の上は、
今後の行
動に對し
ても、自

由にすることを許すといつて下さい。』

とそこは生一本の彼なので、卒直に腹を割つて、嘆願の意味も加へて言つたのであるが、長兄は、眼をつぶつたまゝで顔色一つ變へずに聞いてゐたが、この最後の一言が終ると、

『自由だ？ 阿呆いへ、お前が今日は歸るか、明日は歸つて來るか、警察は毎日手を弛めず待つてゐるんぢや。昨夜などは、三人も刑事が張つてゐたぞ』

傍にゐた母親が、襦袢の袖口に眼をあてゝ、しくしく泣出したので、氣丈の彼もぐつたりと項垂れ、懐かしい故郷も、五尺の身を容るゝ餘地がなくなつたかと、ほろりとする氣持をぐつと壓へて、

『それぢや、東京の方へでも高飛びしませう、どうぞお母さんも、僕が死んだものと諦めて下すつて……』

『不可ん、同なじ足がつくなら』

と長兄は、焦立たしい語調で遮つて、

『今にも踏みこんで來たらどうする、この上親や兄貴に恥をかゝすつもりか。』

『だからつて。ほかに方法ありませんし、』

と彼が立ちかけた膝を下すと、齒をがちがち鳴らしてゐた兄は、堪りかねたやうに、

『自首せい、今晚のうちに自首せい。お前の纏付き姿を、俺は母に見せたいんぢや。』

すると母親は、わあつと泣き出し、

『まあ、兄、さうまで叱るな、これもな、因縁ごとや、佛さんが見てござる、それ悪いことには違ひないが、友達や何かの口車に乗つてしたことやろさかい、まあわしに免じて、今晚と明日の晩は泊めてやつて、頼みや、せめて元日のお雑煮を祝うてから、警察へお前がつれて行つても、遅うないと思ふが』

などと嗚咽をかみしめて口説くのであるが、長兄は母親が宥めれば宥めるほど、その怒りを燃え上らせ、

『國家を忘れてゐる奴に、何が正月の雑煮です。阿呆言ひなさい、近所に對しても、細付きの息子を出して、あんた氣が済みまつか。』

おい、貴様、うつかり外に出てみい、この町内を無事に脱れるもんかどうか、何ちう阿呆や、潔よう自首も出来んくせに、態度胸もないくせに、國家を賣るやうな恐しいこと企らみよつて。』

兄の囁罵は、聲こそ低い、いつやむともなく、少ゝ抵抗の色を見せれば、組み付きさうな容子だつた。

彼は腕を拱ぬき、無事にこゝを脱走するについての用意と方法を練つてゐた。

やがて夕暮れて、外の賑はひは一層活氣を呈して行つたが、彼等一家は戦々競々として、入つて来る客の一人々々に全身の神經を集めて注意しなければならなかつた。

だが母親は佛壇に燈火をあげ、何か口のうちに祈願を籠めなが

ら、やがて此方を向いて、

『さあお前、お父さんに謝りなはれ、謝まつとくと、氣も樂になるさかい』

澤村は馬鹿々々しいとは思つたが、念佛を唱へてゐる母親の、小さな白髪で結つた丸髷の後姿を見ると、ぞくぞく身内に迫る淋しさを感ぜ、すなほに立つて、母親の後から、手を合はせて念佛を唱へた。

彼はその時、非常に不思議な落付きから来る澄みきつた、頭の軽い氣持を味ふことが出来た。それだから、母親の方が、禮拜を済ませて立つてしまつた後も、線香を追加し、うすあかく瞬く燈火に照らされた父の寫眞や、位牌を眺めながら、念佛を續けてゐた。

すると、店の方で長兄が、妙にうはづつた甲高い聲を立てゝ、客に應答してゐるやうだつたが、やがて遠だしく足音を立てゝ入つて來ると、

『おい、警察の方がお出でになつた……』

と強く鋭く彼の方に向つて言ひ、

『どうぞこちらへ、どうぞお上り』

と店の方に元氣よく、然し聲音をふるはせながら、胸の騒ぐまゝに、動作も荒々しく狼狽をこま化してゐるのである。

彼は突差に覺悟を決めて、佛壇の扉を閉めると、またもう一度、別れの禮拜をして、そして入つて來た刑事の方へ向き直つた。

彼が捕へられた時の、さうした光景は、大阪裁判所の豫審でも、公判でも、度々陳述して、裁判長からも、『もしもこの事件が、近松門左衛門のやうな人の筆になつて、淨瑠璃にでも描かれたならば、この時の光景はさわりのやうなものだなあ。』

と裁判長は、大阪の紳士らしい、粹に捌けたことをいつて、かへつて傍聴人をほろりとさせたものである。

(三)

かうして彼は控訴院にまで行つて、遂に四年の刑を受け、その間に非常に鮮かな轉向ぶりを示した。そして三・一五事件に於ける、最初の佛教轉向者の第一人者の如く評判された彼であつた。

何故彼が、憎悪してやまなかつた佛教に轉向したか、それは獄中で研究した佛書によることは言ふまでもないけれど、殊に佛教史を繙いて、法然上人と親鸞聖人との時代に来ると、戦争に負けた平家側の方へ、彼は不思議な同情を感じるやうになり、その平家の武將たちを救ひつゝある法然上人の、宗教家としての大いなる働きが、彼には素晴らしく輝いて觀えたのである。

彼の歴史觀から見ると、とりわけ平家の位置は、今日の資本階級に思はれ、源氏はプロレタリアの位置にみえたもので、憎むべき平家の没落と共に、その没落の哀れさを見ると、こゝに魂の救ひが

なくては、じつに人類は無意味な存在だとしか思へなかつた。その無意味な人生に一道の光明となるものが、とりも直さず法然上人の極樂往生と、他力本願であると解すること、彼は言ひしれない宗教の偉きさと、藝術的な、あまりにも藝術的な光明とを感じないであられなかつた。

彼はだんだん、淨土教の面白味をあぢはつてゐるうちに、いつの程にか、自分もまた淨土教徒の一人として、今日まで辿つて來た非國家的な思想を清算しようかと思はないではあられなくなつてしまつた。

ところで彼には、幾多の疑問が、湧いて湧いて仕方がなかつた。かゝる偉大なる宗教家を、幾人ともなく送り出した、日本の佛教界が、今日となつてどうしてかうも濁つてゐるのであらう、それが彼には、堪らなく苦痛であり、たまらなく憂鬱であつた。

しかし流石に彼は、この厄介な問題を、經濟として、寺院經濟として解決する鍵を握つたのである。

法然上人には、一介の沙門として、無所得の聖者として、確かに唯物物的超越境に立つてゐた。

しかし現代はさうでない、これは間違つてゐる、一つこれを自分ら若き青年の手によつて、革新しゆくならば、唯物史觀のために、儼まされ苦しめられる多くの青年たちを、どれほど救ふかわからない、と考へるに至つて、彼は初めてゆつたりとした、全的の救ひを

受けたやうに感じられた。

彼は法然上人の傳記を、眼を泣き腫らして讀み耽つた中に、殊に平重衡への授戒の光景や、耳四郎への深い理解や、熊谷直實の入信の経路などに至つては、獨房の中で、滂沱たる涙に咽ばずにゐられなかつた。

彼は所長に會ふ度毎、

『われわれマルキストが、反宗教の誤謬に陥つた原因は、僧侶たちが、勞働の立場に立たないで、資本家の味方となつてゐる點にあると思ひますが、しかし本當の宗教の立場に立つと、改善の點や何かが、はつきりして来るやうで、社會に出たら(出獄のこと)宗教改革の一大運動に参加するつもりです。』

と自信を以て言ふのであつた。

(四)

彼の淨土往生の信仰は、だんだん牢固たるものとなつて行つた



が、たつた一つ残つてゐる疑問は、一切の罪を許すところの阿彌陀如來が、果してマルキストまでにも、來世得脱の恩典を與へてゐるかどうかいふことであつた。

これは彼の非常な、惱ましい問題だつた。或時など、教諭師の一人をとらへて、

『大川さん、僕はあなたの信仰が、どの程度のものであるかを、試験するといふ意味ではないけれども……』と彼はにこにこ笑ひながら、

『あなたはマルクスが、極樂に往生してゐることを信じますかどうかです。』と突如として、この奇異な質問を浴せた時には、教諭師大川氏は、答へるところを知らなかつた。

『さあ、そんなこと、考へたこともないけれど……』

と間違つるのは、彼の教諭師としての職務からいつても尤も千萬だつた。

大川氏は彼等思想犯人に對して、佛書を貸與したり、信仰上の質問に應じたり、殊に佛教轉向者を導く、大いなる力を扶植しつゝ、

元 朝

大河内 啞 佛

懺悔して元朝の堂にひかれ伏しぬ
 初明り祖廟の廊に塵もなし
 もゆる如き牛の緋綱や御代の春
 春著人疊廊下をさら／＼と
 初風呂や暖簾くゞれば藍匂ふ
 正月やどの遊びにも居る女
 雪となり福引の傘さしにけり
 歌かるた戀札とりし指輪の手
 露地笠を霰うつなり初茶の湯
 羽子板や羽左と仁左との夫婦振

三・一五、四・一五の思想犯に、かうした稀らしい現象を發見する、一つの歴史的な役割を負担してゐるわけだつたが、それだけにマルクスイズムは、日本國家の害ある思想であると共に、マルクスやレーニンは、宗教の敵であると思つてゐたのである。

この考へ方は、大川氏の場合、尤もであるのに、その宗教の敵、マルクスやレーニンが、お淨土に往生してゐるだらうなどと、そん

な突拍子もない考へ方は、大川氏として夢にも思はなかつたことである。

「大川さん、もしマルクスやレーニンが、極樂往生できないとしたら、僕は耳四郎の罪惡のまゝ、念佛したのを、法然上人が宥された理由が成立たんと思ふがねえ、だから、大川さんは怪しからんといはれるかしれんが、僕はマルクスが、立派に往生してゐると、信じきつて疑はないんです、でなければ一切の衆生を成佛せしめる本願は、ちつとも成就してゐないぢやないですか。」

大川氏は啞然として、その熱しきつた白熾な信仰に、むしろ吞まれたかたちで、たゞ眼をバチクリとして、繼ぐべき言葉はなかつたのである。

「僕等のやうな、全世界のプロレタリアといふ第一義に立つたものには、普通の生溫い説教をしたつて、聞くもんぢやありませんよ。全世界のプロレタリアが、マルクスまでも包含して、淨土に往生するといふ、大いなる宗教的立場に立つて貰はなくちや、僕や、僕はやうな青年には、共命しつこないですよ。」

などと、烈しい口吻で、かりたてかりたて、まくし立てるのだつた。

——といふことを、私は私に紹介の勞をとられた大川氏と、澤村氏自身の口からとて、その夜更けるまで聞かされたことであつた。



三 來 夜 話

庵主の發願

今から、六、七年前の話である。

三河の或村に一軒の尼寺があつた。庵主は東條村眞珠庵の弟子であつたが、名を忘れた。扱て、この庵主はその寺に住してから、一つの念願を立てた。それは寺の本尊阿彌陀像が、在家の佛壇にあるやうな小さなものだったので、自分の住職中にどうかして寺相應な本尊を迎へたいと思つたのである。そこでその資を獲るために托鉢行をはじめ、念願成就に邁進した。降つても照つてもたゞ一

信仰を刻み込む

——或る佛師の話——

増上寺法主

大 島 徹 水

人、一錢二錢の零細な喜捨を押戴くやうにしなから、軒から軒をまはり歩く庵主の姿を、村人が見かけぬ日は一日とてなかつた。さうしてゐるうちに、この庵主の奇特な行事が、立派な本尊の縁に預りたいといふ志から生まれたものであると世間に知られるやうになつたので、やがて人々の同情を深くし、喜捨される額高も次第に多くなつて行つた。かうして五年経つた。庵主は托鉢の淨財が積り重なつて千餘圓に達したので、それをもつて相當の佛師の手になる阿彌陀佛像を購はうと考へた。ところで庵主は日頃岡崎市の昌光律寺

の見事な曼荼羅様の本尊を拜してゐたので、そのやうな本尊を迎へたい心がうごいたのであつたが、自分などには手も足も出ない高價なものであるとは承知してゐた。然し、天蓋や臺座は名古屋あたりで頼めば費用も安くすむし、たゞ佛體だけを名のある佛師に彫刻してもらひたいのであるから、縁さへあればどんな立派な本尊でも迎へられると信じた庵主は、堪らなくなつて昌光律寺に相談しに行つたのである。すると住職は庵主の奇特な話に深く感じてかゝそれではわしが知人に頼んで、これならばと思ふ佛師を紹介して進ぜよ

う。」と云ふことになつた。そして住職は京都七條の田中文彌といふ佛師の名を挙げ、なほその佛師を知るに至つた因縁を物語つた。

「——名古屋の素封家で、有名な浄土宗信者である岡谷家の當主が喜壽の賀を迎へたとき、集まつた大勢の娘や孫達に取圍まれながら、當主は祝の記念に欲しいものがあれば何でも申出ろといふことになつた。すると娘達はかねて相談し合つてゐたものか、一齊に觀世音像を一體、家の佛間に安置して戴きたいと頼み入れたのである。『私達一族の者が、かうして多人數無事な顔を合せられるのも兩親の信心のお蔭です。家に觀音様をお迎へ出来れば、私達が里へ来るたびに私達の信心を増すやうな氣がして結構と存じます。』と、かういふわけであつた。そこで當主も大へん悦んで、早速京都の大島徹水師の許に觀世音像を刻む佛師の世話を頼んだのである。大島師は約半年かゝつて、觀音信者で常に三十三間堂の佛體修繕工の一人に加はつてゐた田中佛師を探し當て、また半年かゝつて遂に岡谷家の

觀世音像を完成させたのである。私は岡谷家でそれを拜んだが、先づ當代に指を屈する佛師の作として、天下に推奨できると思ふ。あれほどの佛師なら、どんな寺院の本尊を刻んでも大丈夫と思ふ。——」

技巧よりも信仰の力

名もない三河の一尼寺の本尊の完成を、その佛師を知るために私のもとに頼んで來たのは、有難い佛縁とは云ひながら、昌光律師から詳しい話を聞くに及んで、私ははたと當惑した。それは費用の點であつた。私は庵主のすぐれた心がけには頭の下る思ひで、一日も早く念願成就に力を添へたいと思つたが、前の岡谷家の觀世音像が五寸丈で二百圓以上もかゝつたことを考へれば、寺院の本尊として安置する阿彌陀佛像の大きさには、おそらく庵主の豫定額の何倍かを注がなければならぬのであらう。それは出来ない相談だ。が、頼まれた以上、私も何とかして庵主の望みを遂げさせたいと思ひ、度々佛師のところに足

を運んだのであつたが、いつも具體的の話をすゝめる機會にめぐまれなかつた。するうちにも、三河から再々の間合せが私のもとに來た。遂には駄目なら駄目で断念するから、はつきりした返事をよこして欲しいとまで云つて來た。そこで、私もどうしても當つて見ようと決心して、佛師を訪れた。七月の暑い日であつた。私は何と切出したものかと、暫くためらつてゐたが、三河から送つて寄こした佛像の下圖を佛師に見せ、思ひきつて云つた。

「今日は無理な頼みに來たんだが、この佛像製作については、工賃を私の方からきめたいと思ふが、どうだらう。」

すると佛師はちつとその下圖を見つめてゐたが、やゝあつてそれを拜むやうに戴くと、「よろしうございます。私はお引受して刻ま

していただきます。」きつぱりした返事であつた。私が、「なぜ工賃も分らんで引受けるのか。」と訊返すと、

「これには仔細があるのです。」と佛師は言葉

をつづけた。「もしあなたが、もう十日早く私のところにいるらつしたのなら、恐らく私はお引受けはしなかつたでせう。丁度、十日前に私は出雲の方から頼まれた三尺餘の觀世音菩薩の立像を刻み上げて送りました。その御像をお別れに拜んだ時、自分は今までに何千體といふ澤山な佛體を刻んだが、かういふ大きな佛體を刻んだことは無い、それにつけてもこんな大きさの阿彌陀佛像を刻んで數多の人に拜んで戴くことが出来たなら、といふ願を起したのです。あなたが入らしたたのは、私に對して佛縁を授けて下さつたとも申しませうか、一所懸命かゝつてみます。」

そこで私は依頼された佛像についての關係一切の話をした。そして庵主の心を傳へて、二尺五寸ほどの座像を七百圓くらゐで完成させて欲しいと附加へると、

「金錢のことはあなたにお任せします。然し期限は受合僧いのです。まあ秋までには御願だけは出来上りませうから、ごらんなすつて下さい。」

かうした佛師の返事に、私はほつと胸を撫で下ろして別れを告げた。

秋になつて再び私が佛師を訪れると、成程佛像の御願が見事に出来上つてゐる。心からの讃辭を呈すると、

「いや、まだ駄目です。」謙遜ばかりでない、明かに不服さうな色を顔にあらはしながら、佛師は訴へるやうに云ふのであつた。

「私は恩賜博物館にある惠信僧都の阿彌陀佛をうつしたい念願をもつてゐるのです。運慶康慶の佛像なら私にも容易に眞似られると思ひます。然し惠信には恐ろしくてなかなか近よれません。技巧ではなく信仰の力が籠つてゐるからです。私は毎朝博物館でそれを拜み、研究しながら自分の作にとりかゝるので、毎日それを繰返して自己の信仰力を培養してゐます。博物館の守衛が、惠信の佛像を寫眞にでも撮つて研究に資したら、毎朝お出でにならんでもすむでせうに、と心配してくれましたが、寫眞に撮つたのでは物がすべて影になつてしまつていけません。——このお

顔もこれから三月ぐらゐ手を加へなければ意に添ふやうに行かぬでせうから、全體の完成はいつになるかわかりません。どうか私の心を察して、私の自由にさせて置いて下さい、その代りきつと取かしくないものを刻み上げますから。」

私は早速この由を三河に通知した。すると折返し三河からよろこんだ返事が來た。

一年経つた。夏の終りごろそれとなく様子を見にゆくと、やつと無事完成の沙汰があつた。忘れもしない九月二十九日、私は家政女學校の應接室に安置された阿彌陀佛像を目見たとき、ぐつと感涙の込み上つて來たのを覚えてゐる。佛師はその自作の佛像に何度何度も禮拜してゐた。越えて十月二日、三河からお迎へに來た僧侶に佛師も自ら附添うて佛像を送り出したのであつた。一旦岡崎市の昌光律寺に迎へられた佛像は、間もなく村民全體の歡迎裡に、尼寺に迎へ入れられたのであつた。念願を成就した庵主のよろこびはどんなに大きなものであつたらう。(二二頁)



門

出

人が、自己の全分を傾けて働きたすことが出来るには、やはりそこに、一つの時期があると思ふ。それは、この社會の中において自分の働く位置がはつきりと定められ、その價值が納得できた時である。それは思想的にも然うであるし、また現實的にもそうである。

○

思想的に云へば、この大きな人類社會の歴史の中で、自分はどうな位置を占め、どんな役割を働くことに依て、未來社會のために貢献することが出来るかといふ事がはつきりして來た時である。

この社會に生れてゐるかぎり、私共は、この社會の歴史のよりよき進展を望まずにはゐられぬ。そのため、そのより善き未來のために、こゝに生れた自己の力を盡して行きたいことは誰しも望むところである。人は、自分の、いま爲すところ

眞野正順

ろのものが、たゞ、このまゝにして畢り、埋もれてしまふ事を、喜ぶものはない。この小さな自分が、直ぐに、廣い人類全體のために役立つといふやうな大きな望はもてなくとも、こゝにお互が形づくつてゐる日本國家のため、更に小さくは己が住む町のため、おのが組合のため、仕事のグループのために、何かしら、自分のいま努めてゐるこのことが、それらの將來の世界のためになつて行くことを希ふ。それでなくては、本當に、自己の全分をあげて懸命になることは出来ないのである。今してゐるこの事が、たとひ、こゝに結ぶ結果としては、貧しくとも、やがては眞實の意味に於て、よりよき未來の人類社會建設のための軌道の上にあり、その爲の寄與となる。かく信ずることに於て、人は顧みられざる事業の中にも喜んで死んでゆけるのである。

人は、この社會進展の上に占める自分の獨自な位置がはつ



きりと定まり、その覺悟がついた時に、はじめてその「人」になり得たのだと云へやう。「自分」をはじめて見出し得たのだと云へやう。その時までには、自分は自分でありながら、まだ本當に自分らしい自分になつてゐない。この全身をあげて集注し、その事の中に自分の全分をさらけ出し戦ひぬいてゆくと云ふ氣にはなれない。いろ／＼な事を讀んだり考へたりしてゐても、未だピントが合つてこないとでも云ふか、すべてが断片的で、おなじ處を何時も行つたり返つたりしてゐるやうである。

ところが、善く自分の立つてゐる環境の過去を考へ、現在の状態を思ひ、これからはどうしても斯うなつてゆかねばならぬといふ、云はゞ、未來への一つの展望が形づくられ、それへと實現してゆく時代過程の中で、自分の働くべき位置がだん／＼と分つて來た時において、人は俄然として全身に生氣が漲つてくる。いはゞ、前途がひらけてくる事によつて、はじめて自己はその微睡から覺めてくるのである。

そうして、遂に決斷を定めて、潔くその事の中に身を投げ入れ働き出すと共に、今まで受動的に社會の事象を傍觀してゐたことが逆轉して、今度は自己を中心とした能動性のもとなり、あらゆるものを自己の見解によつて處理し、自己に伏藏した能力をその全分を費ひ盡してまで戦ひぬいてゆく

こゝろとなる。この時になつて、人ははじめて自己の見識を得たのである。

また、この時になつてはじめて自己は、今迄の自己を超越えて飛躍してゆく。今までの自己は小さくたゞ此處にある自己をめぐり、これを護ることのみ停迷し勝ちであつたが、こゝに至ると、この大いなる役割を果さんがために、むしろそれが爲めの道具手段として、惜しげなくこの自己を供え捧げて行かうとする。その事によつて、今迄の小さな自己の殻は碎かれて、更に偉いなる力が新らしくかつ力強く迸り出てくる。そうして、ここに更に一段の、その人の人格識見の上昇が遂げられてくるのである。

○

人は、この社會歴史の中に、自己の占むべき位置を拾ひあてるまでは、決して其人の自己になれない。この大きな歴史の流れの中にけなげにも立つて奮闘してゐる小さな自己の姿が認められるまでは、決してのび／＼とした博い心をもつてこの社會に生きる事は出來ない。その時がくるまでは、自己は自己とならず、また本當の自己の成長もはじまらない。従つてまた、ほんとうの勇氣も私達の中に現はれてこないものである。

かう考へて來ると、自分は自分でありながら自分ではな



い。自分ならぬこの大きな社會といふものに依らなければ、本當の自分にはなつて來られないといふ事が、しみじみと思はれる。社會に生きてゐるかぎり私共はやはり社會の子である。大きな人類が私共を使ふかぎりに於て、私共はまたそれ／＼の自己を持ち、舊來の殻を破つて絶えず成長が續けられてゆくのである。跳んでもはねても私共は、その生れたる大地から離れることは出來ない。そのやうにまた私共はこの社會から離れることは出來ず、それに育てられなければ、遂に私達自らになることは出來ない。たゞこの大いなる母への寄與貢獻の努力によつて、その子たる私達は成長してゆくのである。

しかも、社會はそれを構成する個人の努力をまつてみ向進するものなるは言ふ迄もない。社會はその子の努力をまつて前進し、その子は母への寄與によつて成長する。ともに「縁起」せられゆくことに依てのみ、一切は常に生長する。——その事は、こゝに於てもまた變らざる眞實の理である。

○

然し、かゝる際に於て、あやまたず、社會の動きゆくその方向を正しく見極めることは殊に大切であらう。人が、この社會において順調なる發育を遂げてゆくのは、その歩む道があやまたず、社會の伸びゆく未來への進展の方向に添ふこと

に依てのみ果される。これの狂ふことによつて、人は却て、憂鬱なる社會の不平兒にと陥ちねばならぬ。

世の事こと／＼我が意に反きて流れ、顧みる者もなき孤獨に、この社會の中に置き残される。その事は多くはこの事から起る。

もつとも、世流に背くところの悲痛なる孤獨は必ずしも常に嘆くべきことではない。かの悲壯なる先覺者の運命はむしろその事において却て尊かつたのである。であるが、識見はまだ浅くして、いたづらに悲憤に暮るゝ生涯に陥る徒も、必ずしも少くはない。まことに善く生きんとする者は、先づその門出に於て眞によく世を見る深い用意が、殊に必要であらう。

そのために、こゝに二つの事を考へておきたい。その一つはかうである。

○

まことに、世の進展しゆくべき方向を見定める爲には、まづ慎重なる觀察と考慮とを必要とするは勿論であるが、しかし、世の一般の常になすが如く、綿密なる考察を、たゞこの社會の過去と現在とに集めることだけで充分であらうか。恐らく眞の未來の社會展開はその人の前に現はれて來ないのが屢であらう。未來は現在を裏切る。歴史の進展はしば／＼



意外なる飛躍を遂げる。ただ過去と現在とに就ての周密なる考慮に頼つてゐるものは、その時に於て目を瞠つて呆然たることが多いであらう。

この社會の過去と現在とに就て、現はれたその相に於て限なき考察を試み、その將來への移動の方向を模索してゐてもそれがその現はれたる外形に於て考へてゐるかぎり、その人は遂に現在の立場から離れてゐないのである。現はれたる形を見る眼において我々は遂にこの現在から離れることは出来ない。我々は現在に生きてゐるものだからである。まことに未だ現はれざる未來に於てそのものを見るためには、そのすでに現はれたる形でなくて、その未來へと轉じてゆく内面の生けるものを見ねばならぬ。すなはち 外を越えてその内を見ねばならぬ。

それならば、社會の外面を越えて、その内面の生命を見るときは、どういふ事であらうか。

簡単に云はう。——それはしばらく外に社會をながめる眼を轉じて、こゝにある己れの自己の内心に奥深く、うごめいてゐる眞純なる要求の聲に耳傾けることである。心は萬物の鏡であると共に、また社會の鏡である。社會の生ける生命の呼吸は、おのづから微妙にもこゝにその影を宿してくる。次なる社會の徴候は、人の胸臆にまだ顯れざる聲として無識

に蠢く切實なる要求の中にその芽を藏してゐる。なぜなれば社會を構成するものは結局個人である。多くの個人の胸中に眞剣に萌しきたる要求が、やがて次なる社會への要求を現はし、かゝる要求を離れて次なる社會はその構成結合は難いからである。人はもつと我が内心の切なる要求の聲を信じてもいい。然し、それが、抑えて抑へがたく、止むにやまれざる眞實のものであるかぎりにおいて、そこにこの大いなる社會の生命に觸れてゐるところがあることを忘れてはならぬ。

われらの心は紛ふかたなくその何處かに社會の大いなる生命の光を映してゐる。然しそれは曇りたる鏡である。まことに更に社會の實相を明らけく、宿すためには、努めて我等はその曇りを拭はねばならぬ。

然らば、いかにして我等はわれらの社會の鏡を拭ふか。それは再びかへつてこの社會の中に改めて問ふことである。すなはち、この社會の過去と現前の機構の中に大きく纏れゆくその推移の必然さを凝視め、その中に苦闘するその一人々々の切實なる聲に、心を空うして耳傾けることである。己れに迫りくるその内心の聲が眞實なりや否やを検するためには、人は先づ己れを空うせねばならぬ。すなはち、己れを越えなければならぬ。己れを越へて一切へと合しその一切の心へと近寄つた時、おのが心ははじめて明澄を加えて眞實を照し、



さきの秘かなる内心の聲は、ここに至つて動かされ、はじめ
て森嚴なる全社會の要請として確立し、次社會展開の基準に
達するのである。

人は己れを空うすることに依てのみ眞實に達する。そこに
また、ほんとうの自己はあつた筈である。

○

然し、かゝる間とても、なほ、人の眼は歪み勝である。そ
うして、猶も社會の秘められたる眞實より背き、かつ惑ふの
である。この時、第二にわれらの思ふべきは、人は遂に社會
に對して「深き信頼」を失つてはならないといふ事である。

嘗て、この社會に於て、好く伸びて行つた人達に共通なる
ことは、その人々が常に社會の前途へ深い信頼をもつてゐた
といふ事である。すなはち、我れの現に、この全身を投げ入
れてゐる事の方が、かならずやがて社會の顯現せずには居
られぬ事柄に屬し、社會は遂に自分を抱擁せずにはゐないと
いふ確信を以て貫いてゐたことである。

社會は、たゞよくこれを信じて倦まざる者のみがその克服
者となり得る。人の内裡を貫く眞摯なる要求は、遂にその人
において最後のものとなる如く、社會に於てもまた然うであ
る。絶えざる有爲轉變の間に社會は、その果てしなき迂路を
めぐりつゝも、遂により善く向上してやまぬものであるとの

信頼を失はざる者にのみ、社會はその最後の榮冠を贈る。

信頼なきものゝ眼は歪む。歪める鏡はいかに磨かれても正
しき姿を映し得ぬ。その意味において私は、その俊敏なる頭
腦に一切を明けく照しながら、然もその根本の態度におい
て、社會をその陰鬱なる歪みの局所にだけしか眺められぬ人
人を悲しむものである。己れの生ける社會に信頼を缺くもの
は、やがてその生涯を通じて敗北者とならねばならぬであら
う。それは自己の分裂であるからである。更により「永き眼」
における社會觀、遠くして大いなる樂觀につゝまれたる生活
をこそ望ましきものである。まことに健全なる逞しき精神は
こゝに生れてくるからである。

端睨すべからざる轉變をもつて刻一刻に變化してゆく社會
歴史の秘密は、もとより定かに計り得るものではないけれど
も、その去來する模糊たる雲霧を透して、やがてその本質を
我等に映しきたるものはたゞ直き心の鏡面に於てあらう。
母の心の秘密をひらくものは、つねに易らざる其子の信頼の
情を通じてであつた。社會歴史の最後の秘奥に參じ得るもの
もまた、これに信頼して倦まず、これに一如となつて働いて
ゆく直き心の持主でなければならぬ。

社會は母、われらは遂にその子であつたからである。

(も一つ、現實的な門出の方は語り得なかつた。またの
機會をまつ。)

短歌

興謝野晶子選

一等 高崎 今井 花子

戸をくれば朝霧しろく流れ入る
土間の塩の火も消えぬべきなど

(評) 秋の朝であらう、爽快な氣持と戸を開く人のつつましい様子、田舎の生活が實感に由つて作られた跡を見る

二等 大阪 成田 豊

山茶花の花地にしろし日の暮れ
寺の小門をそと押したれば

(評) 原作は開けたればとあつた。作者の意は無論外から御寺に入らうとして目にしたものゝ云はうとしたのであつて、押すとしなければ誤られる恐れがあるから改めた。

三等 東京 井上 海堂

港の灯遠ざかる頃船に見る月の
光の清しいよいよ

(評) 船客となつて眺める港の灯と海上の月がよく表現されてゐる。

福島 期日 蝶子

山の子ら篝火に胡桃焼きて食み
秋を楽しむみち足ることく

埼玉 大浦 清子

雑念をふり捨てしごとうら安く
裸木立てりかの丘の上

東京 戸山 信安

香を焚き看經をする沙彌たちの
寒げに見ゆる御寺の師走

東京 小泉 妙春

わが通ふみ寺は森の奥なればも
みちの落葉多に踏み行く

小田原 森田 俊

むかひては悲しきころ慰めし
庭の白菊うつろひにけり

香川 横江 史江

おどろきてわが歩を止めぬ藪か
げに柿のもみぢの美しく照る

福島 山下みどり

大海をはた街の灯を戀ふならん
わが里の川みな東する

千葉 山田 光

われ一人月光を浴び立てるなり

大海を行く船の三更

滋賀 佐々木孝純

魚を干す香のただよひて磯山も
海もくまなく澄める秋かな

北海道 花田 順往

何をして今日になりぬといまさ
らに悔の多かる年の暮かな新玉の年のはじめて嬉しさにま
づ唱へけり南無阿無陀佛

徳島 神原 梅

波羅蜜を夕に唱へ行かんとすわ
れは正念正思の道を

福島 櫻本しのぶ

黒髪に髪すること惜しまれぬ
清らかに長く母に似たれば

東京 渡邊 はる

大空を飛ぶ機のごとくわが心無
碍にひろがり晴れたる朝は

滋賀 垂井 洋

胸に抱く理想のひかり遠けれど
われ若きまゝ物に堪へ行く

福島 吾妻美穂子

軒ごとに干せる大根を動かして
夕暮れに吹く山おろしかな

神奈川 三浦 時夫

わが母の爲になげぬみ佛を信
じ給はで七十路に入る

滋賀 本間 秀道

山のきり流るゝなかに夕鴉さと
羽音たて飛び去れるかな

東京 田代 信夫

落葉する小みちを踏めば何とな
く心の悲し多晴れの朝

三重 伊達 魁堂

わが里も夜寒つのりぬ都にて讀
む弟に給送らん

大阪 小山 文二

賀茂川原風揚ぐる兒のかげ見え
てのどかに吹きぬはつ春の風

興謝野先生並びに岩野喜久代

先生の一方ならぬ御盡力と投稿
者諸氏の御熱心とによつて、本歌壇も當初から見ると非常に充
實したものであります。今後一層努力して浄土歌壇を一層特
色あるものにいたしませう。

歌壇・俳壇投稿規定 官製ハ

ガキに一回三首以内、同欄係宛
お送り下さい。



音おとに觀みる心こころ

相　馬　御　風

大和法輪寺の井上願覺師は不思議な因縁で今年中二度まで陋宅を訪れてくれた。巡教の旅中とはいひながら、わざ／＼越中の巡教先から遠くこゝまで来て貰つたことは感謝に堪へなかつた。良寛さまの遺墨をお目につけたり、良寛さまの話をしてたりした。いづれは良寛さまの引合せに外ならなかつたのであらう。それにしてもそのことが縁となつて、私は同師から多くの得難い書物を贈られたり、又貧しい私の家寶に加ふべき法輪寺推古瓦の花紋のある断片及び平瓦一枚をさへも送つて貰つた。まことに思ひもかけぬうれしい事であつた。

だが、さうしたことは兎に角として、私は同師の執筆に成つた『音に觀る心』と題する小冊子中の左の如き一節から受けた感激はとりわけありがたいたまものであつたと思つてゐる。

『永平寺の大禪師諸嶽奕堂和尚は、ある朝、いつも鳴る鐘を聞いてゐたが、何と思つたか、急に侍者の一人を呼んで、今朝鐘を撞いた者を居間につれて来るやうに命じた。ほどなく新參の僧が居間に伴はれて來た。『小僧、今朝の鐘はどんな心持で撞いたか』はい、別にこれと云ふ心持もなく只撞いたばかりでございます』いや、さうではある

まい、不思議にいゝ音であつたぞ。別に工夫をして撞いたのではありませぬが、只國許の師匠が鐘を撞かば鐘を佛様だと心得て、それに添ふだけの心の憤を忘れてはならぬと常に戒められたことを思ひ浮べて、禮拜しつつ撞いたばかりでございます。大禪師と彌僧の問答はただそれだけである。しかし、鐘を撞く人も撞く人であるが、それを聴き別けた人も聴き別けた人である。撞いた小僧は後の曹洞宗管長の森田悟由禪師その人であつたと聞く。

撞く鐘の音に、その深き信念の態度を觀てとつた奕堂その人の境地などは、まことに、天地を貫く法音、觀世音を、世間種々の音聲のなかにゐて聴き別け得たと云ふべきであらう。

音に觀る心——實に深き洞察の心構へである。

まつたく音に觀る心！である。そしてそれは同時に色に聴く心であらねばなるまい。

この心構へを井上師は更に「入れ物は無い、たゞ兩手で受ける——心構へである」とも喝破してゐる。いかにも味のある言葉である。

x

こゝで私がフト思ひ出したのは、先年私が偶然、或友人から貰つた奕堂禪師の寫眞のことであつた。

私は以前から現在私の住んでゐる町（越後糸魚川）から海岸傳ひに六里離れた同じ西頸城郡内の名立町に生れて、後に永平寺の貫主となり、雲照律師や奕堂禪師と共に、明治佛教復興の爲に奮闘した久我環溪禪師の筆蹟をほしがつてゐた。その私の望みをよく知つてゐた私の友人の一人が、或日環溪禪師の筆蹟が見つかったと云つて、小さい幅物を一軸持つて来てくれた。早速披いて見ると、それは、盛装をした老僧の寫眞を豪張りにし、その上方の餘白に書かれた左の如き文字であつた。

大悲兀坐不滅大梅風致

天德垂手殆似葉縣機輪

明治十二年己卯十一月五日茶毘式之時

大教正永平環溪禪師薰

明治十二年十一月五日の茶毘式は總持寺奕堂禪師のそれである。するとこれは曹洞宗の二大禪師の一人が他の遷化を悲み悼み弔うた最上の記念的遺物で、正に傑僧偉僧を弔うた血涙の滴りの如きものである。

環溪禪師、俗姓は細谷、後久我建通の義子となつて久我氏を稱した。名は密雲、環溪はその號で、別に雪主翁と號した。

この幕末から明治の初期へかけての我が佛教界の大立物であつた傑僧を出した名立町の家は今なほ存してゐる。小學校前の細谷姓の大工さんの家が即ちそれである。

環溪禪師の師梵雅和尚もやはり名立町歌川徹精の子であつた。群童の中から十二歳の環溪を見出し、之れを清涼寺に伴ひ師堅光和尚の弟子たらしめた梵雅和尚もまた尋常の人物でなかつたらしい。

環溪禪師は俳句をも能くした。俳書中の珍本のひととされてゐる『古池眞傳』の着語も環溪禪師の筆に成つたものである。

明治十七年遷化。勅して絶學天眞禪師の徽號を賜はつた。

以上あれこれ餘談に走つたが、餘談ついでに前にその名を掲げた森田悟由禪師と雲照律師とに關する話を一つ書き添へて置かう。

雲照律師も悟由禪師と共に伊藤博文公の厚い敬信を受けてゐたが、或日伊藤公は悟由禪師の室を叩き、常に護持してゐた忠臣萬里小路藤原藤房卿の念持佛であつたと傳へられる虚空藏菩薩を招來して

『これは不思議の因縁により余が手に入りたるもの、嘗て雲照律師に請うて開眼したるが、爾來守護佛として身を離さず所有したりしに、近來菩薩の右手に持し玉へる寶劍を失ひ、佛師に命じて修造するは易々たることなれど、願はくは禪師余が爲に寶劍を授け玉へ。』

と依頼した。禪師之を快諾して早速寶劍を造らせ、更に記文を添へて公に與へた。

この話は菅原洞禪氏の『禪門佳話』と題する書物に出てゐるのであるが、私はこれを読んだ時、すぐに雲照律師がその佛さまを開眼した次第について和上自ら語られたことをおもひ出した。

私は、これも不思議な縁で、二十三歳の頃目白僧園の雲照和上に近侍するの光榮を與へられてゐた。あの氣むづかしい嚴格そのものゝやうな和上ではあつたが、妙に私はかわいがつて貰つた。私は殆ど毎日和上の座下にあつて和上の講述

を筆記し、それを編輯する役目を授けられてゐたのであつた。

或時和上は何かの話のつひでに、その昔忠臣藤原藤房の念

み堂の春

岩野喜久代

百八つの鐘止みて後天地も映ぎすならん霜しろく降る

若水を三世の佛にまゐらすと沙彌ら踏み行くあかつきの霜

南無至心歸命と僧の誦す聲も梅も若かりおん寺の春

十方の佛に申す初春の清きところに行かしめ給へ

持佛であつた虚空藏菩薩が伊藤博文公の手を入つたこと、その開眼を和上が依頼されたこと、そしてこのことの爲に和上か伊藤公邸に行つたことを話され、

「あの時にな。伊藤公がわしを佛間に案内してくだされるのに、片手の指の間に葉巻煙草の火のついてゐるのを挟んだままちやつた。わしはそれが氣に入らなんだで、奥庭の縁の中段に行つた時、閣下今日は折角ぢやが開眼のおつとめは御免蒙りませうわいと云つたのぢや。するとな、さすがの伊藤公ぢや、「これはまことにすまんかつた」と云ひさま手に持つた煙草を庭に投げられて縁に坐つて頭を下げられたぢや。わしはその公の鋭敏な振舞にすつかり敬服させられたわけさ。それで、こつちやからも失禮を謝してな、無事にあの佛さまの開眼供養をすませることが出来たのぢや。やはりえらい人はえらいもんぢやわい。」

かういふやうなことまで語られたのであつた。

此の雲照和上の直話は今でも時々私はおもひ出して折にふれての語り草ともするのであるがこの二大人物の間答にもどこか『音に觀る心』のひらめきがあるやうに思はれるのである。

聖典
講義

武裝したる菩薩道

—『四誓偈』講義—
【その一】

大野 法 道

功祚成満足	閉塞諸惡道	開彼智慧眼	消除三苦冥	神力演大光	志求無上道	離欲深正念	究竟廣所聞	我至成佛道	普濟諸貧苦	我於無量劫	斯願下滿足	我建超世願
威曜朗十方	通達善趣門	滅此昏盲闇	廣濟衆厄難	普照無際土	爲諸天人師	淨慧修梵行	誓不成正覺	名聲超十方	誓不成正覺	不爲大施主	誓不成正覺	必至無上道

われ超世の願を建つ 必ず無上道に至らん、
この願満足せずんば 誓つて正覺を成ぜじ。
われ無量劫に在いて 大施主となつて
普く諸の貧苦を 濟はずんば誓つて正覺を成ぜじ。
われ佛道を成ずるに至らば 名聲十方に超えん、
究竟じて聞かる所なくんば 誓つて正覺を成ぜじ。
離欲と深正念と 淨慧との修梵行をもつて、
無上道を志求して 諸の天人師とならん。
神力大光を演べて 普く無際を照し、
三苦の冥を消除して 廣く衆の厄難を濟ひ、
かの智慧の眼を開いて この昏盲の闇を滅し、
諸の惡道を閉塞して 善趣の門に通達せしめん。
功祚満足することを得て 威曜十方に朗かなり、

漢語の經文の偈は四句を一偈とする。また一行ともいふ。故に十一行偈とも呼ぶ。

阿彌陀佛を「南無西方願王阿彌陀如來」とも、「南無西方極樂世界本願成就身阿彌陀佛」とも呼ぶ。願を生命とする佛なるが故に。法

日月戕重暉 天光隱不現。
爲衆開法藏 廣施功德寶
常於大衆中 說法獅子吼。
供養一切佛 具足衆德本
願慧悉成滿 得爲三界雄。
如佛無礙智 遍達靡不照
願我功慧力 等此最勝尊。
斯願若剋果 大千應感勸
處空諸天人 當雨珍妙華。

一、この經文のもつ重さ 之より數回にわたつて『淨土』誌上で「我建超世願」の講義を續けるのであるが、まづ胸を打つものはこの經文のもつ重さである。

この經文は五字一句から成る十一偈で、『無量壽經』の上卷の一節であり、淨土宗では昔からこれを『四誓偈』と稱へて重要視し、最も簡單な經文として常に讀誦して居るのである。

この經文は實に、『無量壽經』の急所とも言ふべき重さを持つてゐる。

苟くも經文であるかぎり、そのどこを押さへても、何れも皆人の心の養ひならぬはなく、佛のみ心の表はれならぬは無いのであるが、人の身體にも特別に大切な所があるやうに、この經文は殊に重要な部分である。

といふのは、ここには阿彌陀佛の意念が完全に満たされてあるからである。なぜと言ふに、『無量壽經』といへば誰しも無量壽佛即ち阿彌陀佛のことを説いた經であらうと見當はつくが、その阿彌陀佛とはどんな佛であるかと言へば、この佛は進止去來まつたく願の佛であり、願に始まり願に終る、一作一事悉く願によつて行動さるゝ佛である。

その佛が菩薩道を踐みだす第一歩に於て、「何れの願か得ざらん」と言ふ語で記されてあるやうに、既に意氣

日月は重暉を戕め 天光も隠れて現ぜず。
衆の爲めに法藏を開いて 廣く功德の寶を施し
常に大衆の中に於て 說法獅子吼したまふ。
一切の佛を供養し 衆の德本を具足し
願慧悉く成滿して 三界の雄と爲ることを得たまへり。
佛の無礙智の如きは 通達して照さずといふことなし、
願く我わが功德の力 この最勝尊に等しからん。
この願もし剋果せば 大千は應に感動すべし
處空の諸の天人は まさに珍妙の華を雨すべし。

然上人の信仰はこの佛の願力にめざめる所に確立したのである。

天地を呑むものがあり、進んで有名な四十八願が打立てられるに當つては、極めて慎重なる態度で以て、佛教の目指す世界がいかなる姿であるべきか、思惟し選擇されたのであるが、今この經文はその立願が終つた直ぐ次ぎの所に出るものであつて、四十八願の心を總括しつゝ、どうあつてもこの願を成就せねば止まないといふ壯烈無比の誓ひを立てられたことが記されてゐるのである。

その一言一句にも、張り裂けんばかりの強さが溢れてゐるばかりでなく、人を思ひ世をおもふ慈愛の熱がこもつて居り、讀む者をして伏せつてゐた心が、柱のやうに直立するのを覺えさせるのはその爲めである。

願を生命とする佛の心の底を叩いて聞こえた聲の録音である、言はねばならぬ程の重さを持つてゐるのがこの經文である。

二、誓ひのもたらす信　こゝで誓ひといふことについて考へてみる。

世間には種々な誓ひがある。敗軍の將が慘傷の兵を引きつれて、勝ちほこつた敵の城下で立てる降服の誓ひもあれば、「男兒、志を立て、郷關を出づ、學もし成らずんば死すとも還らず」といふ勇ましい誓ひもある。また、仇讐の縁が成立して、禮装いかめしい華燭の盛儀に、變らぬ契りを結ぶ花の誓ひもあるかと思へば、あの元祿の快舉に参加した四十七士の銘々が、隱忍至誠、世間の見る眼にさあらん體にもてなしつゝ、主君の仇を報ずる一念凝つた悲壯な誓ひもあるのである。

これらは、何れも誓ひといふ言葉が用ひられてゐるだけに、何だか誓ひといふには特別のものがあるやうに見えるが、實のところ、誓ひは固い約束のものではない。やがてまたそれは協定でもあり、議定でもある。

約束が一旦結ばれた已上、後になつて之を履行せずして、反古にすることは許されない。

約束が牽制力をもつのは、それは甲と乙との自信と他信とが一致する所に成り立つ約束だからである。約束するには必ず相手があるに違ひない。相手なしの獨りぎめでは約束にはならない。また、或る事を決行する自信を持つただけでなく、相手を信用する所に約束が成り立つのであつて、たゞ自信だけでは約束にはならない。かくて自他相互の信の融け合ふところに成り立つ約束であるから、自然とそこに威力が備はることとなる。

食、瞋、癡——三毒または三根本煩惱といふ。あらゆる人生の迷妄は之から導かれる。

眞の約束は信から出るが、同時にまた、人に信を與へる。

人の世にあつては、約束が必ずしも順調にばかり履行されるとは限らない。破約もあり、放置もあり、甚だしきに至つては裏切りもあり、寝返りもあつて、約束したからとて、それで大丈夫だと油断したなら、それこそ全く豫期せぬ結果を見ることのあるのが現實である。

人の心から貪りと、瞋りと、癡けとが取り除かれなにかぎり、こうした不安は何時までも附いて廻るであらう。がしかし、眞の人間で自分の面目を思ふならば、約束した事柄に對し、どこまでも責務を感じすべきは言ふまでもないことで、時々顔を出すづるけ心を、正義を履みはづした世間話を聞いた爲めの變心を、征服しゆく心構へがあるべき筈である。

約束が不斷に培はれる所に信がある。この場合の信は、づるけ心、變心、さては倦怠、冒漫、放棄、退却など、あらゆる背信のこゝろに打勝つて、どこまでも初發の意志を貫かうとする英氣に満ちてゐるのである。

こゝに約束から、誓ひから、佇立を離れた「前進する人生」が見出される。

三、菩薩が武裝するとは 佛教徒として大乘の生活者である菩薩が、佛への第一歩を踏みだすには、おろそかならざる誓ひが建てられることが諸經に見えてゐる。「大誓莊嚴」、「大莊嚴」、または「金剛意」など云はれるのがそれである。

之は人生の本義にめざめて、佛國の建設に進みゆく道の見定めがついた所に、強烈なる決意を固めることを云ふのであつて、火にも燒き落されず、水にも流し溶かされない、正しい決意をもつことは、人生の最も立派な姿であるから「大莊嚴」と云はれる。また何者の力を以てするも碎くことはできないから、「金剛」に喩を取るるのである。「無量壽經」に「弘誓の鎧を被る」とあるのも、また同じこゝろで、こゝに甲冑に身を固めた、威風堂々たる菩薩の武裝がある。

何故に菩薩は武裝するのであらう。

「鎧を被る」といふ已上、敵の弓矢にそなへる爲めであらねばならぬが、理想への道を踏みしめてゆく途端に

「大誓莊嚴」——「大品般若經。」

「大莊嚴」——「小品般若經。」

「金剛意」——「放光般若經。」

これらの原語は「僧那僧泥」(Samnaha-samnad-

dhū) である

『華嚴經』の中に「初發心功德品」といふ一章があり、菩薩が第一步を踏み出した決意の功德を讃美する。

何時何處で、思はぬ邪魔物が飛び出さぬとも限らない。草叢に潜伏する内外の誘惑は毒爪を研いて、菩薩の來るのを待ち構へてゐるのだから、その用意に武裝をするのであらうか。いや、そうではあるまい。菩薩の行道は、もつと泰然たるものがある筈である。

初めから邪魔物が出はせぬかと、前途を疑ひ懼れを懷いて、戦々競々として出發するやうなことでは、それこそ、水鳥の羽ばたきが夜襲と聞えたり、破れ提灯がお化に見えたりするであらう。そのやうなことで、どうして「大誓莊嚴」と呼ばれる磐石の腹が据つたと言はれやう。

菩薩の武裝には、もつともつと大切な意味がある。

誓ひは約束であり、約束には必ず相手があり、甲乙相互の自信と他信との融け合ふ所に、其の約束があることは前に述べたが、菩薩の誓ひには相手がある。佛と衆生を相手として約束する所に、見定めた佛への道の第一歩が踏みだされるのである。自分ひとりの決心で取りかゝる孤立の強がりには、敵にそなへる武裝も入用だらうが、天地を相手として結ばれたる、信の融け合つた誓約に、何の恐ろしい物があるであらう。何の疑の眼をもつて前途を見廻はす必要があらう。

わが決意を、佛と衆生に打明けた約束の強さよ。

志を立て、郷關を出る、誓ひを持つ青年子女は、是非とも故郷の天地に打ちあけて、信の約束を爲すべきである。曾て遊んだ山の麓の鎮守の森、小川に架けた丸木橋、隣り近所の板塀から、わが家の戸、障子、簾、茶碗など、一切のなじみある物は、喜び進んで彼と約束をするであらう。佛壇に額き先祖の位牌に合掌し、親兄弟友達にも無形無言の約束をするがよい。そこには人間の至信があるから、それに由つて彼は誓約からくる強い威力を感じ得る。

この誓約のもつ信の威力が菩薩の鎧であり、兜である。

それであるから菩薩が武裝するのは、初めから敵を豫想して、それにそなへる爲めではなく、また「千萬人と雖われ行かん」と、徒らなる空威張りに意氣込むでもない。まづたく信の威力を身に着けて、戦はずして勝たんが爲めの武裝なのである。(つづく)

俳壇

大田 耳動子



東京 寶田 砂川
コスモスの花飛んでをり十三夜
東京 平松 白圭
りんだうのふくめる藍や雉の聲
東京 太田 鹿浪
風神の道空にある小春から
東京 間宮一肇子
木の實落きはねかへるも秋深し
東京 古市告天子
菟印帖にはさみし紙の小春かな
東京 鈴置 直水
初冬の朝の銀座をあゆみけり
東京 寶田 有雲
茶の花の枝の深みとなりけり
青森 工藤 汀醉
稲馬の門にかゝりていなゝける
宮城 豊歳 月巴
小さき蟹のかくも小さき鉄かな

東京 小野 三穂
稲をつかみ青年汽車を眺めある
東京 益田 五風
冷やかに鐵瓶の荷のほどかれし
神奈川 村田 柴村
山茶花に牛をつなげるカフェーかな
神奈川 土井芙蓉子
茸狩の藝者の案内たのまれぬ
西ノ宮 越野 孤舟
妻の駕先へゆきたる紅葉かな
東京 鈴木 可折
颪風に百日草のからびある
東京 富澤 逸卿
提灯の傘に明るき時雨かな
東京 小山白郎子
ますらをの狸たをやめの狐かな
東京 太田のぶ江
柘榴かみて明日ををと思ふ

青森 七戸 木賊
小春日の野球納めとなりけり
房州 早山青葉城
トロ線の浪かぶりある夜業かな
東京 早山 梅境
名月の光の静かに降りわたり
東京 相原 雨稻
タイピスト酸漿姫の襟合せ
神奈川 岸 弘竹
芋虫のころけて秋の地ひろし
神奈川 木村きみ子
一天の月と歩みし寒さかな
青森 梅村 渺雲
豊年の畝を走れる小馬かな
神奈川 阿部萬年青
稲刈るやトラツク落しとるより
岐阜 阜 遠藤 蒼衣
眼に見える虫降るやうな小春を
神奈川 前田 光石
鶏頭の青きがかてる下葉かな
岩手 古澤 五葉
蜂の巣の大きく下り如來堂
神奈川 岸 朗子
荷造の破れを秋刀魚とがりいづ

東京 田中 静子
新海苔の黒く光れる艶もちて
東京 寶田 房子
青竹の欄に新海苔ひさぎをり
青森 鎌田 鳥母
汽車走ろうしろへ蜻蛉流れけり
兵庫 楠田 英子
大根の青き畑のつゞきけり
弘前 矢川 テイ
静けさを水輪描きて一葉かな
大磯 久保田一三
鯊釣りのひそかにたちて飯事を
東京 加藤みゑ子
新海苔の青く透きりかざす午に
沼田中 間宮 凍石
火の番の廻れる町に冬来る
大鰐 相馬 照子
菩提寺に落葉の風を聞きあたり
東京 伊原 青路
自動車のきしみ止れる夜寒かな
沼田中 林 正八
返り咲く花見つけけり湯上りに
東京 杉浦茶々子
デパートの休みの扉冬の町

土・淨・筆・隨



鳴立庵雜記

神林周道

文治四年六月十一日、奥州の泰衡京進の買馬買金桑絲等昨日大磯驛に着くと吾妻鏡に見ゆるのが大磯の名の始りである。

服部南郭の「大磯驛眺望」と題する詩に、

蒼茫驛路客愁生 天盡征帆海水平
日落關山當眼近 明朝馬首入雲行

貞應二年、源の光行が海道記には、

と云ふのがある。

「大磯の浦小磯の浦をはるく」とくれ

鎌倉幕府盛なりし頃此所は花柳界と

ば、雲のかけはし、なみのうへにうか

云つたやうな場所であつたらしい、今も

みて、かさぎのわたしもあり、あまつ

ところどころに、なまめかしい傳説が遺

空に遊ぶ、哀れさびしき旅の空かな、

つてゐる、阿波多羅山頂上の下のところ

ながめ馴れてや人は行らん

に「曾我の硯水」と云ふのがある。十郎

大磯や小磯の浦の浦風にゆくともしら

祐成が力足を踏んで水を湧出せしめ硯の

ずかへる袖かな」

水に代へ、遊女虎が許へつや文を送つた

と記されてゐる。

といふ話である。この虎といふ遊女は歌

舞伎などへも出てくる人氣もので、遺蹟が諸所にのこつてゐる。曾我物語に依れば、

「虎と申す遊君はもと平塚宿の者なり、その父を尋ねれば、平治の亂のとき誅せられ悪右衛門の尉信頼の兄、民部權の少輔基成とて、奥州平泉に流されし人の乳母の子と傳へられし宮内の判官家長の娘なり、父死して後母に隨て流浪し、大磯宿の傾城菊鶴と云へるに乞はれてその養女となる、虎十七歳、十郎二十歳にして馴れ初め凡そ三年の間斷金の契り浅からず云々

(意譯抄録)

とあり、十郎没後三七日目の日に箱根權現堂にて薙髪したのが、虎十九歳のときである、此の出家の木像を祀り法虎堂と稱するものが現に鳴立庵境内に在り「縁結び」の利益いやちとなりとて男女の賽する者少からず、法虎妙惠禪尼の法

土・淨・筆・隨

號よりつけられしものと見ゆ、六十四歳大磯に歸り、高麗寺の奥に庵を結び、あけくれ一向専修の念佛を勵みて九品の往生を期したと言ひつたへらるる。

大磯に八景と云ふがある。

高麗山の晩鐘

夕紅葉館の音谷に沈みけり

時處人

花水橋の夕照

夕焼やかさなり立てるいわし雲 同

小餘綾の晴嵐

秋晴やいろなき風のわたりくる 同

鳴立澤の秋月

あきの月鳴も立たざる夜なりけり 同

照ヶ崎の歸帆

おろす帆に子らよびたてり秋の濱 同

唐ヶ崎の落雁

雁のつら月の海原わたりゆく 同

化粧坂の夜雨

街道の夜の静けさや冬の雨 同

富士山の暮雪

たそがれの雪さむざむし浦の不二 同

近く大磯を世間に紹介宣傳したものに、關崎先生、松本順博士がある。こよ

ろぎの濱の地曳網の中に「龍のおとし

子」がかかつてゐるのを發見して、太平

洋から直接の潮流でなければ、龍のおと

し子はゐない筈だ、この點から見て健康

地として大磯を推賞すると云ひ出してか

ら、猫も杓子も此の地へなだれこんで來

て土地の人氣は一時素晴らしいものであ

つた。照ヶ崎には木堂大養先生の筆に成

る關崎翁の謝恩碑が立つてゐる。

驛を海岸口へ下りて岩崎別邸の石垣に

沿ひ左折半丁が程のところ「日本三庵

の一鳴立庵」と書いた道しるべが出てゐ

る。日本三庵とは、京都の芭蕉庵、近江

の幻住庵とを數へたものである。みな俳

諧道に因縁の深い遺蹟である。

こゝの三叉路を前進すること更に半

丁、舊東海道筋は茶屋町の往還へと出

る、直ぐ右手にこんもりと目につく大樺

が鳴立澤である。澤は東小磯字猪狩の丘

間にある新池から町の西端を経て茶屋町

に至り、海に入る小流である。

鳴なくや樺の大樹昔より 時處人

舟板の標木には「西行法師舊跡鳴立

澤」と記され、かそけさせゝらぎが昔の

名残をとめてゐる。

庵は南鳴立澤の西涯、御料林二百八十

餘坪の境域、白砂青松の間に點在してゐ

る、疎竹雜草の伸びはびこるにまかせ、

四つ目垣の間より長汀曲浦が露見してゐ

る。「鳴立庵」の小額は黄檗高泉の筆とし

て有名である。

傳説では西行法師東遊の碑、こゝに杖

をとゞめ庵を結び「秋の夕暮」の歌を詠

じたと言はれてゐる。この地に船着山圓

如院地福寺といふ眞言宗の寺がある、往

古は船着山を先着山と書き、西行は先づ

此の寺に着したといふ口碑もあるが、い

土・淨・筆・隨

さゝか眉唾ものである。西行は文治六年二月十六日、河内國弘川の弘川寺で入寂して居る。弘川寺が古義眞言宗醍醐派三寶院の末寺である關係から或は好事家が後に捏造したものではあるまいか。

道興准后が回國雜誌には、

「鳴立澤といふ所にいたりぬ、西行法師

こゝにて、「こゝろなき身にもあはれは

しられけり鳴立澤の秋の夕ぐれ」と詠

ぜしより此所をかくは名づけしよし」

記されてある、僕の學生時代に指導をう

けた宮内省御歌所寄人金子元臣氏から僕

に寄せた歌に、

「妻子にはこゝろなくてもすぎしかど

あはれなりけりしぎの羽音」

と云ふ一首がある。

七百八九十年前、西行の昔のことはし

ばらく措き、この庵を最初に開いたのは

相州小田原の隠者崇雪といふ人であつ

た。現に残つてゐる五智如來の石像の臺

石の裏面に、寛文四年十一月崇雪造と刻んである。崇雪の行藏に就ては詳なものが全くない。

後、元祿三年の頃伊勢の佛人大淀の三

千風と云ふ人が京都にて文覺上人作西行

澤見の像を得來りて、一堂を此所に建立

したのが圓位堂である、祀るところの西

行の木像は殆んど等身大の旅姿をして居

る。

潮燒の木像くるゝ秋の風 時處人

三千風は勢州射和の産、山口素堂と相

並んで當時の芭蕉に對立し堂々一家をな

してゐた人である、佛典、漢籍、和歌俳

諧、殆んど通ぜざるなく非常の學者であ

り且精力主義の人であつたらしい、庵を

興し臺を築きて後、漂然として行くところ

を知らず傳へられてゐるが、實は確かに

郷里へ歸つて死んでゐる。この人が庵

の初祖である。

二世朱人は普化宗の僧、記傳を詳に

しない、三世鳥醉は、鳴立澤一世とも云ひ、上總の産、松露庵を創し、後此の庵に入り俳諧道場としての庵の基礎を築き上げた人である。四世は百明、五世は白雄である、白雄は信州上田藩士より江戸に出て、天明期の俳壇に重きをなし、「俳諧寂楽」は俳人仲間非常に尊重がられた著述である。長翠、道彦、葛三、保吉、巢兆、冥々、雨晴、碩布、星布女等の逸材皆な其門より出てゐる。

十三世間宮宇山は舊幕府元の士であ

り、相當剛毅な質であつたらしく、西園

寺陶庵公の信を得て親交があつた。明治

三十五年一月二十五日庵にて歿し、歿

後、陶庵公碑を建て、碑面に、

明けゆくや櫻はさくら月はつき 宇山

の遺章を公自ら揮毫し、その裏面には

「不讀樓主人公望建立」と刻してある。

宇山翁は淨土宗の門徒、碑文谷正泉寺の

檀家として、同寺の塋域に葬られてゐる。

土・淨・筆・隨



困 っ た 果 て に

井 川 定 慶

いかにもらしく繕つて言ひ寄られるよりも、ほんとうのことを打ちわつて話しする方が先方に同情を得て所期の目的を達するものである。講演會の講師を依頼するにしても、心當りの二三師に斷られた場合、次に頼む場合にいかにも最初からの候補者らしく言上すると「ナニ他にも澤山あるだらう、僕は今とても忙しいから誰かに電話して見てやる」と親切に應酬されることがある。その場合電話されたら大へんである。其の先生には今仕方斷られて來たところだといふ場合は、平身低頭唯だ御厚意を拜謝して引き退る

より仕方があるまい。こんな時に事情をよく述べ、最初に御願ひに出る筈のところ何分先生は御多忙と重々御察ししまして、誰彼と二三當りましたが誰方も止むない差支へ、枉げて御出ましを」と誠意を披瀝すれば、其の依頼者に同情して都合つけて下さるものである。從來通俗講演に出ることの嫌ひなそして恐らく出たことのない兩三の先生に案外快よく應諾されて嬉しかつたことがある。さやうな經驗を持つてゐるところから他人より困つて來られるとつい繰合せて行くことになる。「一回幾何」ときまつてゐる講演や原稿などは斷るのに遠慮は要

らぬが「謝禮は出せぬ」條件で申込まれるとどうも斷れぬものでもある。

二

四、五年前に京都日印協會を組織して佛誕二千五百年記念事業や日印親善事業に盡す同志を語つたことがある。そんな關係で爾來ボース氏やサハイ氏からいろいろ交渉もある。またいつぞや日本放送協會のプロ編成會で新嘗祭當日に「日本、支那、印度、歐米の收穫祭」の話をレイ式にする相談が出て、人選をしたところが、關西支部（大阪、京都、岡山、徳島）より「印度の收穫祭」の話を割立てになつたらしい。會議終つて係りの人は京阪神の二、三氏に交渉したが其の人がないといふ。困つた果てに當方に交渉して來たのである。幸ひ神戸のサハイ氏に先年それらしいのを聞いてゐたけれども、二三十分も話すほどの材料は持ち合はさない。一再ならず斷つた

土・淨・筆・隨

が、放送局員は事情をのべて懇ろに頼まれる。「よし、ではひきうけませう」

その時折よく東京のボース氏が滞洛中であつたので『印度の收穫祭』を聞いてみたが、嘗て印度總督の農林課の重職にあつた同氏でさへ餘り知らぬといふのである。これでは日本人が『印度の收穫祭』を知らぬのも無理からぬと考へた。

けれどボース氏は都會に育つてゐる。田舎に近く育つた神戸在住のサハイ氏なら材料を提供してくれるだらうと考へて、尋て見ると、果して春と秋との兩季收穫に於いて、田圃に行ふものと家庭内に集り行ふものとの兩様あることを話してくれたのである。また當日唄ふ「歌謠」のレコードなどをかけて聞かせてくれてホツトした。

そこで日本の行事との相似などを織込んでサハイ氏の收穫祭物語を原稿にまとめてみたがどうも豫定の二十五分間に

満たないのである。困つた果てに例の印度民謡のレコードを講演の間にかけることにした。それも一回は調子を高く、第二回目には極めて低調にしてその音楽にあはせて其の民謡の意味を説明することにした。かくすること春と秋との二回繰り返すことによつて時間は丁度よくなりさうである。

當日京都放送局技術部の方々の助力によつて音楽と講和とがうまく調和がとれてゐたそうである。東京の放送局にゐる知人A君から講演中に外國民謡を入れて悠々と話すなど目先が變つてゐて面白いといふ、局内では好評だつたといふ便りを得た、これは困つた果てに頼まれ、自らも困つた果てに考へてやつたことである。うまく行くか行かぬかは最初から考へてゐない。何とか此のお互ひの窮場を切り開かうとしたのに過ぎなかつたのである。お褒めの言葉はもとより案外であ

つた。

三

大阪朝日の京都版に「カクテール」と稱する投書欄があつてなかく賑つてゐる。大學教授、畫家、學生、お役人、實業家等々あらゆる階級の人々が投書して来る。毎日何通、何十通の中から一般的興味あるものを選択するのであるから『沒書』の憂き目にあふものが多數に上ること勿論である。また掲載された記事によつて『筆誅』をうけた人士も尠くはない。この『沒書』の靈を弔ひ『筆誅』の人を慰めんがために去る秋の一日洛西二尊院に於て『筆供養』なるものを営まうといふ提案が讀者ファンより申込まれたらしい。そして其の導師をカクテール會員の小生に行れといふのである。小生にして引きうけずば折角の『筆供養』が行へないといふ。是非枉げても賛同して欲しい。お禮は出せぬが。と朝日新聞か

土・淨・筆・隨

らの交渉であつた。大阪朝日京都支局ではこの前代未聞の行事をとり通すのは如何にも惜しいらしい。それを聞かされて遂に「よし、來た、ひきうけませう」と決意した。

當日朝日新聞フアンは小倉山の麓、法然上人の靈跡たる二尊院に可なり多數集つた。法要の差定は極めて簡單にし、沒書追善、筆誅惡靈の意味を含めた祭文を讀み上げ宗教的儀禮を莊重に執り行ふことになつてゐた。定刻に至るや一同は既に本尊前兩側に案内されてゐた。稍々あつて、二尊院の羽生田住職に伴はれて小生は靜々と入堂して行つた。ところがその日の服裝はといへば背廣の洋服に二十五條袈裟といふのである。會同者の中からはクスリクスリと忍び笑ふ聲が聞えて來た。此れは既に覺悟の前である。こちらに至つて謹嚴、三拜終つて道場洒水をなし型の如く差定をすゝめて行つた。そし

て讀經に入る頃にはみんな眞面目になつて合掌するもの、同音なるものありて焼香のときなど會衆百餘名が鄭重に禮拜してくれてほんとうにうれしかった。本尊前の法要終つて廣庭で「沒になつた原稿」を火葬にし、あとは一同洛西の秋の眺めを恣にして閉會したのである。

四

さて洋服に二十五條の袈裟は見慣れぬからこそ可笑しいのであつて何も不都合なことはない筈である。近頃名士の講演の際、モーニングの上に簡單な袈裟を首にかけてゐられるのと何ら異つたところがない。袈裟のみが印度の服裝を偲ふべ

きもの、我が國現今の法衣は支那唐代の服裝である。時代の變遷に伴つて支那服を西洋服に着更へても差支へないわけである。袈裟にしてもさうである、出家沙門の釋迦の弟子達は、新しい布帛を用ひる身分でないために、道途に捨てられたる布片や喜捨の古着を綴ぎ合せて作り成し身に纏ふたのである。袈裟を身につけるにしても其の作られたる最初の精神を體得して、廢物利用、質素儉約の實を擧げねば濟まぬやうな氣がする。

◇佛典說話全集 全十三冊揃 窪川 拾五圓

◇國譯一切經 全百五十五冊揃 窪川 百拾圓

古本宗教書籍目錄

最近古書時報

御入用の方は各冊とも送料二錢づゝ、御送附を乞ふ。

電話小石川三七七〇番
振替 東京五七三七番

東京市小石川區白山前町
窪川書店

童 話

重 い 大 き な 袋

山 田 巖 雄
野 水 昌 子 畫



ガンヂス河の流は、何時の世にも
盡きること知らぬやうに、ゆるやか
に流れてゐます。ヒマラヤの山々は、
その限りなく雄大な姿を、目映ゆい太

陽の光の中に、遙かに現はして居りま
す。
河のほとりの恵まれた平和な町だ
が、何時からか其静けさ、和やかさを

破られるやうになりました。騒がしく、
荒々しく、時には血なまぐさくさへな
つたのです。それはたつた一人、シウラ
といふ悪い男がこの町へやつて来て、
住むやうになつてからのことでした。
町の人たちは、何とかしてこのシウ
ラを町から追ひ拂つてしまひたい心持
で一杯でした。しかしシウラは氣が荒
荒しいばかりでなく、力は強く、技に
も猛けてゐたので、町の人たちの力で
は、どうすることも出来なかつたので
す。もしも彼に手向ふやうなそぶり
も、見せやうものなら、その男は殺さ
れ、家は焼き拂はれてしまひました。
善惡の道理を説いて聞かせて、彼をな
だめやうと試みた人もありましたが、
その結果は、彼の刀に血が塗られただ
けのことでした。
シウラはまるで生きた鬼のやうに、
人々から恐れられてゐました。

そのシウラが、今日もまた何を怒つたものか、ひどく暴れ出しました。その日、町の中は奇麗に掃き清められ、美しく飾られてゐましたのに。

「困りましたね。あのシウラがまた荒れ狂つてゐるさうですね。」

「日もあらうに、切角かうして、皆が喜んで佛さまとそのお弟子の方々をお迎へ申し上げやうとしてゐる時に……」

「いや、そのために皆がシウラのことを構ひつけなかつたことが、あいつの氣に入らなかつたらしいのですよ。」

「やウ、シウラがやつて來ましたぞ。」

町の人たちは、右に左に逃げまどひました。

「弱虫めら、誰でも俺に刃向ふことの出来る奴があつたら出て來い。」

シウラは右手に血の滴る刀を振り廻しながら、あたりをねめつけて歩いてゐました。町の通りには、人影一つ見

へませんでした。

その時、町の外から一人のお坊さんが、靜かに歩いて來ました。その落ちつ

いた様子は、暴れ狂つ

てゐるシウラの姿

などはまるで目

にも入らないか

のやうに見へま

した。

お坊さんはし

づしづとシウラ

の方へ歩みを運

びました。それ

がシウラの怒りを

一層まさせました。

「こら、そこへ行く奴。」

大聲でわめき立てましたが、お坊さ

んは少しも恐れる様子もなく、靜かに

シウラの側へ近寄りました。



二人は向き合つて立ちました。

シウラは刀を振り上げて、にらみ付けました。お坊さんは、立ち止つたまま、やさしく眼を半ば閉まりました。

するとどうしたことせう。シウラの怒りに怒り狂ひに狂つた心が、だんだん静まつて行つて、振り上げた刀を何時しか力なく下へおろしました。しかしシウラの目はまだ、お坊さんをにらみつけてゐました。

「誰だつ。この俺を怖れもせず見つめるお前は。」

「私は佛陀だ。釋迦牟尼佛だ。」

「お前が釋迦か。ふん。見ると聞くとは大さうなちがひだ。伴もつれずたつた一人で、何をしに俺の前へ來たのだ。」

「汝を憐れに思つたからだ。汝を救つてやらうと思つたからなのだ。」

「なに、この俺が憐れた。可哀さうだ。」

助けに來た。馬鹿なツ。俺が何時助け

てくれといつた。いつ弱い音をふいた。弱い奴等はこの町の奴等だ。誰一人俺に手向ふ勇氣のある奴もない。可哀さうな蛆虫達なのだ。」

「いや、その弱い町の人達より、もつと弱いもつと可哀さうなものは汝なのだ。」

シウラはまた怒に震へて申しました。

「この俺がどうして弱い。何故可哀さうだ。見ろ。この腕を、筋肉がこんなに盛り上つてゐるのが見へないか。見ろ。この身體のたくましさ。力づくで腕づくでこの俺に敵ふ者は一人もゐないのだぞ。さあ、どこが弱い、何故可哀さうだ。返事をしろ。返答次第によつては、おのれ一打だぞ。」

「静かにするがよい。落付くがよい。シウラ。汝は力自慢と見へるな。」

「力自慢ではない。俺の力は底知らずなのだ。暴れ牛さへ打ち負かす程だ。」

「それでは、シウラ、この袋が持ち上げられるか。」

お釋迦さまは、シウラの前へ、一つの袋をお置きになりました。

「なんだ。こんな袋の一つや二つ。袋の中味が石であらうと、鐵であらうと譯なく持ち上げて見せるわ。」

シウラはその袋に兩手を掛けて、一氣に持ち上げやうとしました。しかし袋はびくとも動きません。シウラはかがんで袋を背中に背負つて立ち上らうとしました。ところがその袋の重いこと、シウラの身體が大地の中へ、めり込むかと思ふ程の重さです。身體中の骨がくだけるかと思ふばかりです。いくら齒をくひしばつてみても、とても袋を背負つて立ち上れない、と知つたシウラは、よろめきながら、その袋を

投げ捨てました。すると大地はゆれおの、きました。

「持てまい。背負へまい。どうじや。シウラ。」

「うぬ。變なものを持つてゐるな。何だ、この袋は。」

「この中には、汝の罪惡の重さが入つてゐるのだ。自分の罪惡の重さに氣が付くがよい。いくら力自慢の汝でも、それだけは背負ひ切れまい。」

シウラは、びつくりしたやうにお釋迦さまを見守りました。けれども負けず嫌ひのシウラです。こんなことで弱味を見せるとが恥しかつたのでせう。

「嘘だ。嘘だ。なんのこんな小さな袋。」

シウ

ラがいきなり片足を上げて、袋を踏み破らうとすると、足は袋の中へ入つてしまひました。もう片方の足で袋



を踏まへやうとすると、その足も袋の中へ入つてしまひました。兩手を掛けて袋を押へやうとすると、手も袋の中へ入つてしまひました。これはともかくうちに、シウラの身體はすっかり袋の中へ入つてしまひました。

袋の中は眞黒闇で、一筋の光もさしてゐませんでした。

「俺をこんな袋の中へとぢ込めやうとしても、こんな小さな袋の一つや二つ引き裂いてくれるぞ。」

シウラは、袋を破つて抜け出さうとがきました。袋の端をつかまうと、手を延ばしましたが、手には何もさはりません。手探りで二歩、三步、五歩十歩、どこまで進んでも、はてはいくら一生命懸走り廻つても、まつくらな袋の中は、涯なく廣がつて行くやうで、いつまで経つても、どこまで行つても袋の口も、底も、側も、手に當りませ

ん。その中に袋の重みがだんぐんとシウラの身に押し寄せてきました。身体は押しつぶされるのではないかと思はれました。骨はきしむやうに痛みます。シウラは、漸く生れて始めての恐ろしさを感しました。

「うーむ。魔法をつかつて人を苦しめるのは卑怯だぞ。俺を外へ出せ。尋常に腕づくでこい。」

「自分で外へ出たらどうぢや。しかしたとへ百年、千年はおろか、幾萬年もがき廻り、馳け廻つても、その袋からは一足も外へは出られまいぞ。」

「うーむ。」

さすがのシウラも、今はたゞわづかにうなるだけで聲も出ません。

「汝にはその袋の大きさが判るか。その袋の大きさは、汝の罪惡の大きさなのだ。幾千萬年経たうとも、汝の力では抜け出すことの出来ぬ大きさぢや

ぞ。罪惡の袋から抜け出すことは、汝ばかりではない、誰の力も及ばぬことなのぢや。人が罪惡の袋から逃れ出る途は、たゞ一つ、佛の御力にすがることにはないのだ。たゞ佛の御力によつてのみ、逃れ出る途は開かれやう。」

シウラは漸く我慢の角を折りました。自分の力でも及ばぬことがあることに気がついたのです。同時に自分これまでにした様々の悪いことを思ひ出しました。自分の犯して來た罪惡の重さ、大きさに身慄るひしました。

「お釋迦さま。私は自分の悪いことに気がつきました。お願いです。どうぞ私を救つて下さい。そしてあなた様のお弟子に加へて下さい。この悪い男のために、この罪惡の重さ大きさから逃れる途を教へて下さい。」

袋の中でシウラは手を合せて、頭をうなだれました。

「シウラよ。目を開いてみるがよい。汝の言葉が眞實なら、汝はもう袋から出ていやう。」

シウラが目を開いてみると、袋はもとのまゝで、何事もなかつたやうに、自分の側にころがつてゐました。お釋迦さまはもとのやうに靜かに立つて居られました。

シウラはその前にひざまづいて、合掌したまゝ、いつまでも頭をたれてゐました。

(終)

こどもの
よろこぶ

法然上人御繪傳

(兒童用三六版美麗折本)

特價 送料共 金拾二錢

オフセット數度刷の文も繪も美しい物語り。

東京芝公園明照會館内

浄土宗兒童協會

信 仰 相 談

現在利益と未來往生

(問) お念佛に同時同音の利益があるならばそれだけで充分だと思はれますのに、何故に未來は極樂往生とか順次往生とか矛盾がましきことを殊更に標榜せられるのでせうか。

(三重 傳)

(答) お尋ねの「同時同音の利益」と云ふ意味がよく判りませ

んが、何か據所でもあるのでせうか。時宗などでは「萬行離念

一遍證」と云つて、彌陀の名

號は萬行離念の相だから稱名

の時、我もなく佛もなく大悟の

境地に入ると云つて居ます。そ

の事を指して居るのでせうか。

一遍上人の「稱ふれば佛も我

もなかりけり南無阿彌陀佛々々

々」とか、徳本上人の「徳本が

阿彌陀佛々稱ふれば我が阿彌陀

佛々稱ふれば我が阿彌陀

か阿彌陀が我が」と云ふやうな謂ゆる念佛三昧の境地を云ふ

にしても「順次往生」と云ふ

未來往生を問題とすべき筈は

ありません。むしろ一層に強く

未來永劫の解脱を要求する氣持

になるでせう。それを唯だ頭で

理窟で考へやうとするから、稱

名と同時に解脱するならば何

も敢て未來往生を願はなく

もよきさきうなものだと疑問を

生じて來るのかと思ひます。然

し「一人一日の中に八億四千の

念あり、念々の中の所作皆な是

れ三途の業なり」と云つて居ま

すやうに、私達の數多い念の中

で、よし念佛の時の一念が彌陀

の中に統一せられ、清淨無垢

な姿になつて居りませうとも、

直ぐそのあとの念々が汚れた穢

ない愛慾のこゝろから起つて居

るものであるならば、結局淨

穢を繰返へして居る譯であつて

本當の解脱境とは云はれませ

ん。そこで最後の一念で清淨

になり後に念を起さない「肉體

の死」の關門を通過した淨土

への生誕が望まれて來る事は決

して矛盾でもなく、故意に標榜

した氣持でもありません。

ことに念佛に對して「利益」

と云ふやうな功利的な氣持を持

つて居るのは、過程としては許

されても、高い解脱境などでは

「三惡道の名もなし」で、氣ぶり

にだつてある筈はありません。

あなたの御實感は如何ですか。

煩惱を斷たなく

ても

(問) 一、菩提と涅槃とのわけ

を委しく御説明下さい。

二、不斷煩惱得涅槃と云ふ事

をわかりやすく御教示下さい。

(奈良 指月生)

(答) 一の問題は十二月號の

本欄を御覽下さい。第二の問題

は念佛すると「涅槃」と云ふ煩

惱のない状態を煩惱を斷ち切

らないでも自然に得られると云

ふことで、或は「涅槃分」を得

るとも云つて居るやうに、完全

ではなくとも一分の涅槃を得る

ものと申します。即ち素直な氣

持で「南無阿彌陀佛」と唱へる時

其處には邪智我見と云ふやうな

穢ない氣持はなく、純粹に如來

様の中に、たとへそれが一瞬と

云ふやうな短い時間でありませ

うとも、スツカリ統一され融合

されて居りますから、其時の一

瞬文は誠に輝やかしい寂淨

の光りを放つて居ると云つても

よいでせう。つまり些やかなも

のでも正しく「得涅槃分」の實

驗實證をして居る譯です。

(編輯の都合上今月は一頁にし

ましたので、他の質問は次號に

廻しました。何卒不惡)

「小消息講義」

—(その一)—

中村 辨 康

「小消息」とそれを得た人

小消息の別名

黒田の聖人

「一紙小消息」ともまたは「上人の御(又は小)消息」とも「黒田の聖人へつかはす御文(又はお返事)」とも云つて居ます。

黒田の聖人と云ふのは、和語燈録日講私記と云ふ本に依ると「黒田とは武家の名字で、紀伊、和泉、美濃などにも地名があるけれども之れ等ではなく、伊賀名張群にある黒田をさすもので、そこには遺跡の一字があり、現に石塔が残つて居る。そして其石塔には正面の真中に「日本浄土宗元祖源空上人」とあり、其左右に二人宛四段にならべて「何々上人」と八人の名が彫つてある。其第一は黒田だとは思はれるが、文字が磨滅して見えないので、實名も分らない」と云つて居ます。

また大日本地名辭書を見ますと、現存して居る「黒田」と云ふ地名は全國十二箇所もありますが、伊賀の黒田は名賀郡錦生村の一部で、名張川の西岸にあり、昔は随分大きな村で六箇山、神戸などに接して居

小消息の價值



り、東大寺の寺領に屬して居たとのことです。

其處に一人の聖がつゝましやかに住んで居り、法然上人の教へを受けて、念佛に専心せられ、多數の共鳴者もあつたと察せられます。

わけでも面白いと思ふのは石塔の「日本淨土宗元祖源空上人」と彫つてある字であります。無論「淨土宗」と云ふのは今まで云つて居るやうな一宗派をさすのではなく廣い「念佛宗」としての意味でせうが、法然上人の上足の隨一と云はれた九州の鎮西上人でさへ、當時澎湃として盛んだつた「反法然主義」に遠慮して「善導宗沙門聖光法師」と名乗らざるを得なかつた程の時流に對抗して、敢然として「日本淨土宗の元祖」と銘をうち堂々と氣を吐いた其意氣は、實に巍然たる俠骨の持主とも云ふべきで、その颯爽たる風格は誠に目に見えるやうではありませんか。(寫眞はその石塔)

名も知れない黒衣の一聖者、然し本當に典型的な純粹無垢な熱情的信仰人だつたと見えます。

さればこそ、こんなにも充實した御手紙を貰つたのでせう。法然上人の御消息は随分數多くありますけれども、こんなにまでスツキリとまとまつたのはありません。そして此の名も知れない人への一文が、後世如何に多くの念佛信者を悦ばせ、如何に念佛信仰の糧となり得たかを思ひますとき、多少でも信仰を志す者に取つては其一無名人への思慕が湧然として湧き立つてまゐります。

また此「小消息」は一枚起請文とならんで、最も大きな信仰上の寶玉であり寶典であります。一枚起請文よりも一層

大師はうなんしやう法然上人はうなんしやう

人のこと

萬機ばんき普益ふえき凡ふん

ての人の教

はれること

超世しやうせい本願ほんがん世せい

間並かんへいでない

根本こんぽん的な誓

ひ

順次じゆんじ往生おうじやう命めい

が終はつれば直ちやく

に極樂ごくらくに生なま

れること

宗門しゆもん相傳さうでんの口

訣けつ信仰しんやうの

奥義おくぎを口で

傳でんへること

正像末三時

くはしく法然上人の信仰感情を發現して居るだけに、別な意味に於て珍重し熟讀し翫味し體驗すべきものだと思ひます。

法洲上人と云ふ方は「大師の御法語何れおろかあるべき様はなけれども、別して此の御法語は、萬機普益超世本願の蘊奥をあらはし、順次往生掌をさす如く示し玉ひし故、宗門相傳の口訣にも選用する最極至要の御法語なり」とさへ云つて居られます。

自分と目的と行爲との一致

末代の衆生を往生極樂の機にあててみるに、行すくなしとてうたがふべからず、一念十念にたりぬべし。罪人なりとてうたがふべからず、罪根ふかきをもさらはず。時くだれりとてうたがふべからず、法滅已後の衆生なを往生すべし、いはんやこのごろをや。わが身わろしとてうたがふべからず、自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといへり。(依和語燈錄)(法語抄四六)

末代と云ふこと

「末代」なんて云ふ言葉は、實際を白狀しますと私達にはピンと來ません。何故でせうか。それはグン積極的に伸びて行かねばならぬ現代の私達に取つて、かうした世紀末を聯想させるやうな言葉は、何となく厭な感じを起させるからです。即ち

釋尊滅後五百年——正法時代

其以後の一千年——像法時代

其後の一萬年——末法時代

と云ふのですから、昔の方がよくて今の方が悪いと云ふ意味に取れます。無論古來からさう解釋して來たのでもありますが、ヤレ澆季だのヤレ世の中は末になつたのと、よく云つたものです。

然し「阿彌陀經」に依ると、釋尊御自身「我れ五濁惡世に於て此難事を行ず」と云つて居られますが、もしそれが事實だとすれば釋尊時代だつて濁惡の世であつたのだし、時代だつて思想國難や經濟國難などの重複して居る濁亂時代なのですから、そこに大した異りはない筈で、さう何も取り立てゝ云はなくてもよささうな氣がします。

文化發展の上から見ますと、私達の文明は年と共に發達して來たので、時代を経るに従つて益々煩鎖になり、だんだん周圍が利巧にもなり、随つて生活も複雑化して來まして、謂ゆる世智辛くなつて行くのですから、此意味で「世は末」と云へない事もあります。それは唯だ「五濁惡世」の濃度が幾分か増さつたと云ふ丈に過ぎないのではありますまいか。

して見れば現代的にはもつと異つた意味に解してもよいのではないかと思はれます。で、方面を更へて歴史的に觀察して見ますと、

正法——證(行中心)——原始佛教時代——印度時代

像法——教(學中心)——大乘佛教時代——支那時代

末法——信(信中心)——淨土教時代——日本時代

こんな風になりますが、これだと今までとは餘程趣が變つて、佛滅二千五百年と云ふ近代的研究の數

淨土教信仰の
優位

信仰への疑ひ

字が、非常にハッキリと光りを放つてまわります。即ち事實上、佛滅五六百年頃から大乘佛教が興隆し始め、佛滅千五百年近くになつて、我國に於ける念佛の先驅者恵心僧都が現はれ、千六百年頃に法然上人が生誕せられて、信仰的な佛教を大成せられ、それから此來、民衆が始めて佛教に親むやうになつたのですから、正法時代は印度並に其周圍の若干の國々の少數の人々に限られ、像法時代は東洋全體に廣まつたとは云へ、是れ亦た少數の僧侶及び學者に限られ、末法時代に入つて初めて大衆的に廣がつた末廣がりの時代と云つて然るべきであります。だから「正」とは亂れて正しからざる者をただし整へる義であり「像」とは形作るの義であり「末」とは梢の義であると(簡野氏の)解した方が、古來からの説とは違つては居りますもの現實に即して居るやうにも思はれます。

尤も法然上人は、其當時末法思想に依ておびやかされて居た國民的不安を、信仰といふもので、一時に鎮定せしめたのでありますから、淨土教と云ふものは、末法思想と云ふ黒い網をこして出て來たものではあります。

しかしそれは何れに致せ、宗教内容としては、少數の優秀な者だけを相手にするものよりも、多數の雑多な人達を相手とするものの方が、一層優れて居なくてはならぬのは當り前なことです。そしてそれは最勝であることと云ふことだけではなく、も一つ最易であることと云ふ必要條件が具備して居なければなりません。そこが法然上人の苦心せられた點でもありましたでせう。普通常識では、よいものは其代償が高く、値段の安いものは品質が劣つて居ると云ふ一般概念を超越することが出来ませんから、ツイ「淨土」と云ふやうな理想生活を我が物にするには、反省すればする程、餘りに自分の價値の低いのに遠慮せざるを得ない氣持が起つてよい筈であります。つまり歌舞伎座の一等席を立見料金で得られと云つても、それは嘘だらうと疑つて見なくなるのと同じであります。

自己反省からの問ひ

ところが宗教的見方では、さう云ふ因果的な經濟觀念を超越して居るのですから、とても嬉しいではありませんか。久しく外國に行つて居て死んだとさへ傳へられた金持ちの叔母さんが、外に近親のものがあるにも拘らずヒヨツクリ歸つて來て、急に相續人にしてやると云ひだしたやうなもので、單一的な因果關係は何處かへ消し飛んで、無我愛的な因縁圈内に抱擁されてしまふのです。

四つの自己反省

黒田の聖人と云ふ人は、餘程常識にも富んで居り、綿蜜な反省をもした人だつたと見えます。即ち、理想生活を獲得するのに、念佛は、

一、餘りに其代償とすべき行爲が僅少であること。(自分の行爲に就て)

二、餘りに罪惡の結晶であること。(自分の現實に就て)

三、周圍が餘りに濁つて居て、獨り清まらうとしても、とても覺束ないこと。(自分の環境に就て)

四、餘りに聖者とは縁の遠い凡夫であること。(自分の本質に就て)

かう云つた四つの反省が、念佛に就ての疑ひとなつて、吉水の草庵へ提供されたものと見えます。

無理もないことです。

然し、それは餘りにも因果觀念に捉はれて居ります。そしてまだ自力的な根性が抜け切れて居りません。

恐らく、今までに法然上人とも度々の交渉があつたことでありませうし、念佛には精進して居られたのでせうが、まだ本當に「本願念佛」と云ふことがのみこめず、信仰が確立して居られなかつたと見えます。先入主と云ふものは容易な事で取れるものではないから、それは全く無理もないことです。

因果觀念からの疑ひ

撥無因果||因果
果を無視す
ること
邪見||道理に
そむいた見
解

それは堅の關係

何しろ、屹度聖道門的な教養を受けて居られたのでせうから。
ですから一般的な因果觀念から申しますと、

一、小因大果 (原因が小さくて大きな結果を得ること。)

二、無因有果 (原因無きに結果を受けること。)

三、他因自果 (他人の原因で自分へ結果が振り向けられること。)

四、惡因善果 (悪い原因で善い結果を得ること。)

及びこの夫れ夫れの反對の場合の因果關係などはあり得ないことで、若し有ると思ふならばこれは「撥無因果」であり「邪見」であるとされて居ります。

然るに念佛の信仰では、

一、僅かばかりの念佛で、大きな結果が得られる。

二、自分は罪惡の結晶であるのに聖者の仲間入りが出来る。

三、若しそれが自分の力でなく、如來の他力に因るものとするならば、他因自果であり、無因有果である。

之では因果と云ふ算盤に合はないことになつて、無軌道であり、非倫理であり、滅茶苦茶であつて、どうしても道理にそむいた邪見邪信と云ふことになります。

と、まあ、一應考へても然るべきでせう。

ところが、それは堅の關係だけしか見て居ない單なる理窟で、此の外に横の關係があることを忘れて居るものです。

實際の私達日常の現象を見ますと、

横の關係といふこと

惡因
十
惡緣
||
惡果

善因
十
善緣
||
善果

惡因
十
善緣
||
惡果又は善果

善因
十
惡緣
||
善果又は惡果

こんな具合で、實は無數の状態があり得るのですから、簡単な因果關係だけでは解釋が付きません。例へば粃を蒔いて稻を作つたとします。

一粒の粃だから一粒の米粒だけが取れてよいのですが、事實は三十粒も四十粒もとれます。かと思つて、肥料や人力などの關係で、もつと澤山とれるかも知れないし、下手をすると一粒も取れないことになるかも知れません。量の上だけでもさうですが、質の上でも場合に依つては青米や小米や秈米などの多い惡の結果を收めないにも限りません。

だから粃に内包する力だけで結果を推定することは出来ません。それに加へられる他の力が色々に左右するものですから、その横の關係をも考慮に入れる必要があります。

宗教の上でも、自力的な考へ方では、此の横の關係を考へに入れずに、自分のなした小さな行爲で大きな結果を得られる筈がないと考へたり、自分が罪惡の塊だから救はれる筈がないと決め込んだり、或は時代がいけないから周圍が駄目で、隨て周圍に引きづられ勝な自分は到底助かる見込がないと思つたり、煩惱を斷ち切らないで何うして清い世界に行かれやうかと疑つたりするのですけれども、一度、横の關係即ち他力の強い力を是認するならば、直ぐさうした考へのくだらないことに氣がついて、疑問は解消され

上人の解決

る筈です。

それを法然上人は、頭からビシヤンと叩き付けけないで、親切にも

一、行の多少は問題ではない。なぜなら、經典には乃至十念とか一念大利無上功德とか示して居られるから。

二、罪の輕重も問題ではない。なぜなら、五會法事讃などにも不簡破戒罪根深々と云つて居られるから。

三、時代的の濁惡も問題ではない。なぜなら、經典に經道滅盡獨留此經一と示されてあるから。

四、煩惱の斷不斷も問題ではない。なぜなら、善導大師も信下知自身是具足煩惱一凡夫と云つて居られるから。

と、一一經典や先賢の言葉を引いて、叮嚀に其の疑問に答へられて居ます。

それは、昔の人は、單に論理だけでは満足しませんでしたし、經典や書物にある文句を證據に引つぱり出すと、直ぐ一も二もなく納得する癖がありましたから、理窟抜きで端的に然かも簡單明瞭に、さうした證據としての文句を取り出されたのだらうと推察されます。

さうして置いて、偕て徐ろに段々と、信仰内容の眞髓とそれに対する感情や法悦を、追ひつめ追ひつめ、疊みかけて述べられて居るのですから、論法としても實にうまいもので、ちつとも無駄のない充實した名文だと感心させられます。

それにしても、問題の提供者たる黒田の聖人と云ふ方もえらい人です。
なまじいの人では念佛に對してかうして、

行修因果觀

機教不相應
人と教へと
が一致しな
いこと
新しき教へ

一つの不思議

罪惡觀
時代觀
一般的凡夫觀

の四方面からの觀察と其反省とは出来なかつたでせう。

つまり念佛が聖道門的見地から「機教不相應」と見えたとともに、自分への深い反省が行はれたので、餘程信仰的な人だつたと見えます。

それをまた逆に同じ材料を以て、純粹に「機教相應」せるものとしての確に斷案を下された法然上人のするどい叡智と強い確信とは、實に驚歎に値ひするものがあります。

まだ今ほど文化の進んで居なかつた七百何十年の昔に、そして聖道門的理智でかたまつて居た學問佛教流行の時代に、こんな偉大な萬人に許される信仰を體驗し開顯した法然上人こそは、誠に「日本淨土教の元祖」として、黒田の聖人をどんなに驚かした事でせう。

此法然上人を一エボツクとして、それから僅か百年ばかりの間に、臨濟宗が起り、眞宗が興り、曹洞宗が起り、日蓮宗が興つて、日本大乘佛教の總幕出揃ひを現出したのも、一つの不思議であります。

更にもう一つの不思議は年數の數字の上に於て、偉大なる神武建國から偉大なる明治維新までの恰度眞中に、偉大なる聖德太子が現はれて、日本佛教の端緒を開き給ひ、其偉大なる聖德太子と偉大なる明治天皇様との恰度眞中に、私達の法然上人が誕生せられて大衆に信仰的佛教を顯示した此の歴史的事實は、單に不思議だとのみ云ひ去る事は出来まいと思ひます。是れは私達に何を示唆し何を暗示して居るのでせうか。大きな謎として考へたいものです。(つゞく)

(一般に流布されてゐる小消息の文句は「勅修御傳」二十一卷に載せられてゐるもので更に選練されてゐますが、今は「法語抄」に従ひ「和語燈錄」の文をひきました。)

編輯後記

◇賀正 法然上人讃仰會

本部員一同

雑誌「浄土」も本年で三歳、愈々教界のみならず、社會的にも相當な反響を呼びおこし、布教戰線の主要部隊として認められるに至つたことは、一重に全會員、全讀者、並びに、寄稿者諸賢の御援助の成果と心からなる感謝の辭を呈せずにはおられませぬ。正教の宣揚、法然上人が御遺徳の顯照は現代社會に於ける重要な任務の一つ、何卒、今後とも充分なる御指導、御教示の程を切に御願ひ申上ます。

◇本號には、管長親下の年頭の御感想を始め「私の生きる信念」として政友會幹事長安藤正純、林博本田清六、醫博井口乘海、文博服部宇之吉諸先生の御寄稿になる特輯を發表しました。年頭に

當つて終生の計事を立てるに御參考になるものと信じます。その他諸名士の執筆になる各篇は新春に當つて必ずや新鮮なる氣運を注入するに裨益するものあらんと存じます。

◇特に本號から講義ものを二つにし、中村辨康師には「小消息」大野法道師には「四誓偈」を連續して掲載して頂くことにしました。◇明春三月、勢觀、鎮西、紀主三上人の御遠忌が、京都知恩院に於て全宗門を擧げて大々的に行はれることになつておりますので、法然上人讃仰會に於ても「浄土」三月號を三上人遠忌特輯號として發表することになり既に着手しております。それは大増刷を行ふことになつておりますので、諸君の御援助を切望します。なほ三上人の傳説、逸話等にて、あまり世間に知られておらないやうなもので、御氣付きになつたこ

とがありましたら、四百字詰原稿二枚以内にて、御送り下さい。掲載の分には薄謝を呈します。

◇わが讃仰會に於いても、愈々全國に統一的な運動を開始する時期となりましたので、會のマークを制定したいと思つておりますがこれは廣く會員諸君の中から募集しなければなりません。このマーク募集に就いては理事會で既に決定しておりますので、應募規定の詳細は次號に發表しますが、讀者に於ても御氣付の點はどしどし御申越下さい。

◇とまれ、新しき年を迎へ、舊倍の元氣を以つて活躍せんものと本部員一同はりきつております。諸君も良き新春を迎へ一年の大計を樹立されんことを庶幾します。

高級布教用書として講話一枚起請文を御利用下さい。十部以上は一割引の九錢で販賣します。

浄土 新年號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十二年三月三十日印刷納本
昭和十三年一月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人讃仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料五厘)

一ケ年 金一圓

(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人讃仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「浄土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

宗教講話に新生面を開いた名講義！

新刊
出來

布教用書の
最高峰

枚

起

請

文

發行所

法然上人鑽仰會

定價 拾二錢
送料 共

振替……東京八二一八七

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上
購入する場合は
一部當り 九錢（送料不要）

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

特 價 提 供 本 年 十 二 月 二 十 八 日 限

文學博士 望月信亨編 全六卷（索引共）〔内容見本・申込規定進呈〕

佛敎大辭典

學界翹望の大著完成

本辭典は佛敎學界の第一人者望月信亨博士が三十年間苦心經營の結晶にして、今や滿天下の絶讃を博し、申込殺到！爲に帝都の紙價昂騰せんとす。特價期限切迫！即刻申込あれ。

辭典 四六倍版、六號活字、三段組、總頁五千八百八頁、挿畫凸版一千四百八十四、原色版、コロタイプ、寫眞版一千六百圖、大版大曼荼羅二葉等
索引 三百頁、和漢梵巴語六萬餘項、附録地圖大版十二葉、背皮、角皮、天金、函入

◇定價金九拾六圓也

◇一時拂價 金七拾六圓也

◇特價 金八拾圓也

（辭典一冊金十五圓）
（索引 金 五 圓）

一回毎に金拾五圓、最終回に金貳拾圓（辭典第五卷及び索引代）御拂込下さい。但し特價期限内に少くとも一回分御拂込なければ特價提供は致しません。

◇書留送本料（一冊宛）

辭典（市内十二錢、地方五十七錢）
索引（市内十二錢、地方三十三錢）
臺、樟、滿、鮮、六十二錢

東京市本郷區駒込蓬萊町四十六・十方寺内

佛敎大辭典發行所

發行所

振替東京五三七六六
電話大塚五〇四九

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十一年十二月廿日印刷納本 昭和十二年一月一日發行

淨 土 第三卷 第一號

定價金十錢（送料五厘）